
おとこのおんなのこ

平山ひろてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おとこのおんなのこ

【著者名】

Z8870Y

平山ひろてる

【あらすじ】

ある日、百合百合な女の子が男の子になってしまった！
これからどうしよう！ わからないわ！
ドタバタあり、シリアルスあり。
何とも言えないすれ違い恋ラブノベルです。

プロローグ　『おんなのJ、男のE』（前書き）

ガンガンと批評よろしくお願ひします。
よろしければよろしければ。

ガールズラブなのか？　どうなのか？
これは、どうかテロリーズされるんでしょうね。

プロローグ　『おんなのJ、おとこのJ』

こんな想いをしたことは、ないだろ？

あなたが男の子なら、女の子になつてみたい。女の子になつて、自分の胸を揉んだり、色々な可愛い服を着たり、きやつきやうふふと、女の子仲間と、楽しい会話を繰り広げてみたい、と思ったことはないだろ？

あなたが女の子なら、男の子になつてみたい。男の子になつて、色々な遊びをしてみたい、自分の「ゴツゴツ」した、男らしい身体に触れてみたい、無茶なイタズラをしてみたい、女の子同士の世知辛い人間関係から離れ、さぱつとした男社会に触れてみたい、そう思つたことはないだろ？

実際にそうなつたら、どうなるのかなあ。

そんな喜劇の物語。そして、叶わない恋に胸を焦がす、少女たちの物語。

「ふあー……」

五月。そろそろ新しい環境にも慣れ、人々の気が緩み始めるステキな季節。

ここは、ちゅんちゅんと小鳥がさえずり、カーテンの隙間から、温かな陽光差し込むあたしの部屋。

ふんわりとした羽毛ベッドの上で、十五歳の高校生であるあたしこと、青木朱音はむくりと身体を起こす。

昨日は、夜遅くまでテレビを見ていた。

『女の子同士での恋愛なんて、ぜーつたいにありえない、きもちわるーい、キャハハ』とさつぱり言い切った女子高生に、悲しみを覚えながら、枕を涙で濡らしながら眠つたものだ。

『男の子になりたい』。

女の子に生まれたら、きっと一度は思つことだらう。むしろ、一度も思つたことがない子が存在するのか。少なくとも、あたしの周りには一人もいなかつた。

でも、彼らとは体格も違い、バカそつに無邪氣そつに、男同士で楽しげに笑う、彼らの残酷な姿を、少女は傍で見つめることになる。男の子と触れあいながら子供ながら、『男の子になる』という、その考えが達成できないことを知り、やがて、少女として生きてゆくことを決断する。

まあ、そんな小難しいことはどうでもいい。

あたしは、いわゆる『百合系女子』だ。注目すべきは、百合女子ではないことだ。

女の子が好き好き。であるけれど、まあ男の子も嫌いじゃない。どっちでもいけるが、どっちかというと女の子が好きなだけだ。男の子の友達も多いし、告白だつて何回もされたことはある。でも、愛してしまったのは、男の子じゃなかつた。

まあ、そんなこともどうでもいいのだ。

叶わない夢を見続ける中で、やがて現実を見つめねばならない。ぼうつとする頭の中で、小難しいことを考えたからか。

どうも、おかしな夢をまだ見てしまつているようだ。

あたしの髪の毛は、ふわりとした肩まで伸びた地毛の茶髪、身体は絹のようにすべすべで、胸も人並み以上にあるはずだし、街を歩けばそれなりの人間が振り向き、厄介な人間に声をかけられる。そんなり程度の女の子。

であるはずなのだが。

サイズに余裕があるはずの、お気に入りのパジャマは、どこか窮屈で。

身体が違和感の塊になってしまったよつた、おかしな感覚がする。

「へええ……？」

ふと、自分の胸を見ると、割れた風船のようにじょんじょんでした。ふつくらとした胸は小さくなり、まるで男の子のようになつている。

小さくなつた、なんて簡単に表現できるものではない。べつたんこすぎる。

こんなのは、悪い夢だ。

どうして一夜にして、あたしが貧乳にならなくてはならないのか。こんなものは悪い夢に決まっている。まだ、悪い夢を見ているのだ。

だからこそ、あたしは頬を軽くつねつてみる。

痛い。夢じゃなかつた。

IJの貧乳化事件は現実で、あたしの胸は実際にしぼんだのだ。

「どうして……？」

いや、胸だけじゃない。

声も、何となく自分のものではないよつた、そんな感覚がする。どちらかといふと、ソプラノ寄りの声色だったはず。しかし耳に入つてくるあたしの声は、オクターブ下がりのアルトボイス。ぺったんこになつただけではなく、喉までやられてしまつたのか。しかし、なぜ、どうして。様々な疑問が、起き抜けの頭に浮かんでくる。

そこであたしは、一つの嫌な予感を頭に浮かべた。

もしかしたら、男の子になつてしまつたのでは？
アニメや小説、ゲームではよくあることだ。
朝起きたら、少女が少年になつていた。

逆も、しかし。

でも、それは創作物の中での話だ。
現実には決してありえない。

だからこそ性転換は、嗜好ジャンルの一つとして成立するのだ。

「ええー……」

まさか、まさかね。

恐る恐る、あたしは直ぐりの下腹部に、おそるおそる手を移動させる。

何もないはずのそこには、男の子である搖るがぬ証拠。

……そのものが、存在していた。

今までそこにはなかつたもの、少女が持つはずがないもの。
それがあつた。

え？

まじで？

ありえなくない？

わけがわからない。

わけがわからないが、とりあえず叫んでおく。

というか、口が勝手に動いた。

「えええええええ！」

Jの日から、物語は動き出した。

男の子になってしまった、何の変哲もない、百合系女子の日々が
変わったのだ。

第一話『おとなの恋愛物語』

「ちゅちゅちゅうとう父さん！ 母さん！」
ばん、と勢いよくリビングの扉を開く。
すると。

「あらあら？」
「どちらさまだい？」

リビングのテーブルに向かい合って、楽しそうに何かを話していた男女が、あたしの顔をじっと見つめた。

中性的な顔立ちで、もう三十後半のおっさんのクセに、未だに会社の同僚に男女問わずモテるという、父さん。ちなみに彼は英国人を父に持っている。

もう一人の女性は、元モデルで今もたまにテレビに出ており、わが親ながら美しい母さん。あたしの容姿は、きっと彼女から受け継いだものだらう。

「それどこかじゃないのー、男の子になっちゃったのー！」
思いつきり叫ぶが、二人はくすくすと笑って、こちらを見つめている。

「おはよう、朱音」

「なんでそんなに冷静なのよおおおー！」

あまりにも父さんは冷静すぎて。

「その声で叫ぶと、変な人に思われるわよ？」
あまりにも母さんは平常運転すぎる。

「で、でもお……」

何だ、この一人。

あたしが男の子になつたといつのに、何の反応もないのか。
とにかく、落ち着きなさい。朱音」

「うん……」

「見た目は、そこまで変わってないわ

「ほんとに？」

僅かな希望が見えてきた。

容姿が少女そのものなら、『男の娘』として生きることも出来る。

「うん。父さんそっくりよ」

「えええ……」

ちょっとシヨック。

父さんそっくりってことは、普通に男寄りじゃないか。

娘じゃない。男の子だ。うわん。

「そんな嫌な顔しないで欲しいなあ。僕に似るのはそんなに嫌かい？」

「嫌じゃないけどね……」

父さんは中性的な顔をしてるし、かつて悪くはない。

どちらかと言えば、モテるほうだらうけど。

「別にいいじゃない。朱音、あなたは男の子になりたがってたでしょ？」

「ただけどお……」

確かにそうだ。

あたしは、男の子になりたかった。

男の子になれば好きな人に告白して、付き合って、結婚できるかもしねれない。

女の子同士だと、それさえ叶わない。

同性婚しようにも、好きになつた相手が百合少女じゃなければ、想いは成立しないし。

百合少女が恋愛の結果を迎える。

そんなドラマや小説の風潮が、あたしは大嫌いだった。
だからこそ、この変化（変身？）は喜ばしいことではある。

あるのだけれど。

何か割り切れないなあ。

そんなことを考えるあたしを尻目に。

「じゃあ市役所行かないよね、母さん」

「そうね。今日はお仕事休めるの？」

「はは。大事なことだからね、有給を取るよ」

「そう。じゃあ市役所行きましょ！」

「そうだね、行こう。帰りに久しぶりに遊ぼつか」

父ちゃんと母さんは、一人で何やら話を進めていた。
市役所？ 休む？ 一体どうこうことなのだらう。

「ど、どうしたの？ 父さん、母さん」

「性別が変わりましたよーって、言いに行かな」といけないじゃな
い？」

「このままだと、朱音は女の子のままだからね」

「ちょっと待つて、そんなのでいいの？」

性転換する人も、この「時世多い」。

多いけれどもあたしのこれは、性転換と言えるのだらうか。
手術とか、そういう話の前の問題ですけど。ねえねえ。

「はは。お役所仕事だから」

「何とかなるわよ、何とかね」

「ええー…… そうなのー？」

父ちゃんと母さんがそう言つのであれば、そつなのだらう。
きっと大丈夫なのだ。たぶん。

「で、でも、父さん母さん」

「ん？」

「どうしたんだい？」

「あたし、これからどうしたらいいの？」

女の子が、ある日男の子になつた。

そんな非現実、経験したこともないし、聞いたこともない。

「男の子になるしかないわね」

「そうだね」

母ちゃんと父さんは、顔を見合させて頷き合つてゐる。

「どうやつて？」

「朱音はもともと、男の子みたいなものだし、今まで通りでいいんじゃないかな」

「そうね。化粧品もいらないだろ？」「お洋服代も浮くわ」確かにそうだけど。化粧品とか高いし。朝の忙しい時間にファンデとか乳液とか化粧水とか、色々準備するのもだるいし。それがなくなるだけでも、かなり楽にはなるだろ？

「う、うん。でも、学校は？」

「こればっかりは、どうしようもない。

いきなり、男が女であるはずの『青木朱音です』と主張して、校内に入つても、不審がられて通報されるのがオチだ。

「そうねえ……」

「お友達に聞いたらどうだい？ えーっと、汐里ちゃんに」「しおりんに……？」

頭の中に、友人であるお嬢様の姿が思い浮かぶ。
高飛車で、どこかいけすかないが、何故か親友ポジションに落ち着いていた少女。

「理事長の娘さんだし、きっと何とかしてくれるわよ」「何とかなるかなあ……」

うーん。

『あら、あなた誰？ 近寄らないでください』とか言われるような、そんなオチが見えてるが。

「そうよ。電話してみなさい」

「はーい。じゃあ、今日は学校休まないといけないってことなんだ」「そうなるわね。まあ、汐里ちゃんと話しなさいな」「はーい……」

あー、ゆーうつ。

男の子になれたのは嬉しいけど、女の子友達にどうやって説明すればいいのか。

よくよく考えれば、今まで苦労して維持してきた、女の子同士の

「ハコーティーにも参加できないんだよね。

」これからは学校生活、一体どうなつてしまつんだろうなあ。

さて。父ちゃんと母ちゃんは出かけていった。

市役所に、あたしの性別が変わったと告げに行くと言つ。笑い飛ばされるのが関の山だと思つのだけど、彼らは根拠のない自信のようなものを持っていた。

根拠がさっぱりわからない。

でもまあ、とりあえずだ。

「早く来てねお願い、泣き顔……っど。送信」

電話をしたら、声で男だとバレ、警戒されてしまう。

そんな心配をしたあたしは、メールで家に呼びつけることにした。家に呼びつけたこと自体は、今まで何度もあったことで、おかしなことじやない。

ただ、あたしが男の子になつている、といつおかしなことを除けば、おかしなことでもなんでもない。

「返信はやつ！」

『すぐ行きます』

メールを送つたら、簡単な返事がすぐに来た。数秒後に来た。さすがあのシンデレラ嬢様は非常時には優しい。シンデレなだけある。来てくれると言うので、とりあえず自らの姿勢を、洗面所にある鏡の前に立つてチェックしておく。

「……男じゃん」

顔立ちは本当に、父さんに似ている。

女なのか、男なのか。

顔だけを見ればあまり見分けのつかない、中性的なものになつており。すべすべした綿のような肌は変わらず、肩までかかる、茶色の短髪も変わっていない。

でも、身体の骨格と筋肉が、そこはかとなく変化している。

それにちょうどいい具合に、ぷにぷにだった身体は、筋肉でかち

かちになつてゐる。細い腕に、しつかりとついた筋肉。力を入れなければふにふにしているけど、入れると鉄のよつに固い。

全力でぶん殴れば、壁に穴が空くのではないだらうかなあ。そんな錯覚すらある。

身長もちょっと伸びてるし、色々と無茶苦茶だ。

小さかつたお尻は、少し大きく男の子っぽいものに変化して、もはやはいていたパンツなんて、ぴちぴちになつて、ゴムが緩んでいた。

「これじゃあ絶対にしおりん、わかってくれないなあ」「どうしたものかなあ。

今の自らを写真に残し、過去の自分を見せたならば、絶対にその写真があたし自身だとは信じないだらう。何となく似ているかも、とは思うだらうがほとんど別人だ。

「とりあえず、着替えるかな……」

「のまま待つても仕方ない。

こんな無茶苦茶なパジャマ姿でいても仕方ない。

幸いなことに今あたしは、父さんとあまり背が変わらなくなつてるし、父さんの服を借りよう。うん。そうしよう。

そう決めて、あたしは父さんの部屋へと向かうのだけれども。

その時、ピンポーン、とインター ホンが鳴つた。

「あれ？」

さすがに、しおりんが来る時間ではない。

先ほどメールを送つたばかりだし、彼女は学校に行く準備をしていたはずだから、絶対にここに来るはずがない。
宅配便とかその辺りだらう。

「あー、もう。めんどくさいなあ」

母さんがいるときに来て欲しかつた。

今は非常事態だ。あたしはとても困つてゐるのだ。

そんな時に、来訪者の応対なんてする余裕があるわけない。

「居留守使おひつ」

それしかない。

普段なら出ていくが、今はそれどころではないのだ。

申し訳ないと思いながら、あたしは父さんの部屋へと再び向かう。その間インター ホンは何度も、ピンポンポンポンと連続して鳴らされていたが、居留守を使うと決めたのだからと、気にせずに歩いていく。

でもうるさい。

あまりにもうるさい。

さすがのあたしでも、気になってしまふ。

先ほどから鳴らされたインター ホンの数は、軽く十回以上。いい加減にしろといつものだ。

「仕方ないなあ」

とりあえず、顔だけ出しておひつ。

これだけインター ホンを鳴らすのだ。きつと重要なことに違いない。

それなら、早く出てあげなければ。女モノのパジャマ着たままだけど。まあそういう家庭もあると思つてくれるだらう。それより、緊急の用事があるのだろうし、きつとそんなことは気にしないだらう。

「はーい、今行きまーす！」

アルトボイスであたしは叫ぶ。

そして、とてとてと玄関へ走る。

「はーい」

ドアノブに手を掛け、ゆっくりと回す。やがて開かれてゆく扉。

その先にいたのは。

「朱音さん！ すぐ来いつて話だったのに、どうして出ないので…

…す？」

「あれ、しおりん？」

一人の少女の姿。

夜の闇のように黒い髪を、可愛らしさに白のリボンでまとめたツインテールにしている。その顔立ちは端正で、造形美に満ちており、ぱっかりと開いた吊り目、ふっくらとしたルビーのように赤い唇を持っている、あたしに負けない程度の美少女。

黒崎汐里。

通称、しおりん。

あたしと同じ学校学年で、十五歳の高校一年生だ。
中高一貫校である我が校全体をまとめる、生徒総会の副生徒総長
でもある。

「わやああああー。」

その彼女が、顔面を真珠のように輝かせて、甲高い声で叫んだ。
「しおりん可愛らしい声出すね」

可愛らしい。

こんな声を聴いたのは、結構久しぶりのことだ。
「ど、どうして、どうしてわたくしの名前をつ！」

「やだなあ、そりや知ってるよ。何でも知ってるよ。しおりん、右
のおっぱいの下あたりにホクロがあるよね。ちつちつこの」

「ぐ、変態っ！」

「変態って何や……」

失礼しちゃうわ。

あたしは百合少女だけど、変態じやない。ノーマルだ。

「女物のパジャマ着てるくせに、どこが変態じやないのですー。」

「だって着替える途中だったし

「き、着替え？」

「うん」

むづくつと説明しないと。

あたしが男の子になつた。そつ相談しないといけないのだけど。
しおりんは、そろりそろりと背を向け、あたしの前から去つてい
こうとしていた。

「そ、そうですの。じゃあ失礼しますわね……」
「待つて、ちょっと待つてしおりん」

その肩に手を掛け、軽い力で抑えたつもりだった。
が。

「いたつー！」

「あ、『』、『』めん」

意外に力が入つてしまつっていたようだ。

本当に軽く、力を入れたつもりなんだけど。

「まだ何か御用ですのわたくしは早く電話しなければいけないとこ
ろがあるのです」

「どこに電話するの？」

振り返り、むすつとした顔であたしを見つめるしおりんに、尋ね
てみると。

「そ、それは教えられませんわ」

「あたしとしおりんの仲じやん」

「あたし？」

「うん」

どうしたのだろ？

しおりんは、顔を青ざめさせているけれど。

「やつぱり変態ですわあああー！早く警察に電話しないことー！」

失礼な。

やつぱりも何も変態じやないのに。

つて、それどころじやない。電話するつて警察にか。

そんなことされたら、あたしの人生設計が狂つてしまつ。

何としても理解してもらわないと。

「ち、違うんだってばしおりん。あたしは朱音、朱音なんだよ」

「男じやないですかー！」

すかさず入る突っ込み。

「お、男の子になっちゃった」

「意味がわかりませんわ……」

「うん……だからね、ちょっと説明させて欲しいんだけど」

「よく見ると、朱音さんのお父様にそっくりですけれど……」

「でしょ?」

「でも、それはあなたが朱音さんだという、証明にはなりませんわ」「そうだな……えーと、右のおっぱい横にあるホクロ」「殴りますわよ？ そんなの、わたくしを盗撮すれば、すぐにわかるじゃないですか変態」

ひやあ、盗撮犯だと勘違いされている。

決定的な証拠だと思つたんだけどなあ。

「そ、そうだよね。ごめん。えーと……」

うーん。

あたしあしか知らないことで、あたしがあたしだって証明できる証拠。

何があるだろ?。父さんと母さんがいてくれれば、簡単に証明できただけどなあ。

「出来ませんの?」

「ちょっと待つて、今考えてるから」

「……はあ」

やれやれ、といった感じでいつものように、ため息をつくしおりん。

「いや、自分が何者かを説明したり、と言われると結構困る。それなりに困る。どうやって自分を証明すればいいのか。特に、あたしは女の子から男の子になってしまった。

自らの身分を証明するものなんて、存在を認めてくれた親以外に誰もいないし。

「この前、遊園地行つたよね、一緒に。アイス食べたじゃん」

「そんなの、朱音さんを追いかけねばわかるでしょう」

即断。

あら、今度はストーカー疑惑。
しおりんの盗撮犯かつ、あたし自身のストーカー疑惑。

困った。非常に困った。ダブルスコアだ。

「うーんじゃあ、この前、数学のノート見せてあげたよね」
「見たのは、朱音さんのほうですわ。ノート真っ白だつたじゃありませんか」

「そうだつけ?」

「はい」

即断。困ったなあ。あたしとしおりんしか知らない」と。
それでいて、誰も知りえるはずがないこと。それを探すのって案外難しい。

「んー……」

アニメとかゲームなら、すぐに納得してくれるはずなんだけど。

あんまり都合よくいかないなあ。

「じゃあ、どうやつたら信じてくれる?」

「小学校一年のわたくしの誕生日のとき、わたくしにくれたものは何ですか」

「頭にチョップ」

即答。

簡単なことだ。小学校のときの話。

クラスメイトであつた、いけすかないお嬢様の誕生日パーティーに乗り込み、頭にチョップをかましてやつた。そこから、何やかんやとあつて、その娘とは友人になり、現在まで関係が続いているのだ。

「それを知ってるといつ」とは……

「信じてくれた?」

「はい」

良かつた。警戒を解き、笑顔で頷くしおりん。

これで、話を次の段階に持つてゆける。

「それは良かった」

「でも、どうして朱音さんが男の子に？」

「ちょっと詳しく述べたいから、中においでよ」

「はあ……」

「詳しく述べるけど、あたしも自分の現状に詳しくないんだだけじゃね」「じゃあダメじゃありませんの」

「その通りだ。

女の子に戻れるのか、それとも男の子のままなのか。

原因は何か、どうしてこうなったのか、そんな問題を解決することができない。

しかし。

「でも、しおりんにしか頼めないこともあるし」

「そ、それなら仕方ありませんわね」

頬を赤らめて俯くしおりん。

可愛いじゃないか、お嬢様。

ずっとそんな感じで、しおりんしてくください。

「うん。じゃあここ！」

「その前に！」

「うん？」

何で止められたんだろう。

「服……着替えたほうが多いのですわ」

「あ、そ、そつか！」

ぴちぴちの衣物パジャマ、明らかに違和感がある。

冷静なしおりんの突つ込みにて、自らの異常を再認識した。

「……はい」

「じゃあ、先にリビング行つてねー。」

うーん、どうなるんだろう。

期待半分、不安半分。先が全く見えない。

そして、リビング。父さんのものであるジーパンとシャツを着て、

とつあえずはこれで済ませる。」れであたしは、見間違えることな
き、男の子だ。

あたしとしおりんは、何とも言えない氣まずい沈黙の中、テーブ
ルの椅子に座って向かい合ひ。

何を話せばいいのか、頭の中に話題は浮かぶのだけど、声が出な
い。

「朱音さん」

「は、はい」

「声、上ずつてますわよ」

「そ、そう?」

「はい」

しおりん、冷静だなあ。

「緊張してるんだよね……。しおりんは、驚かないの?」

尋ねると、顔色一つ変えずに彼女は答えた。

「正直、わたくしは動搖しています」

「そうなの?」

「今すぐに来い、というから、必死に走ってきたのですが」「
そりなんだ……」

ありがたいお嬢様だ。

本当に、こうこうこうこうは優しい。シンデレラだし。

それにしても早かつたよね。すぐに来てくれたよね。

「そしたら、朱音さんが、男の子になっているのですから」

「あはは……」

「どうして、そうなったのですか?」

不思議そうにしてしおりんは尋ねるが。

「わかんない。朝起きたら、男の子になつてた」

あたしにも、原因や理由はさっぱりわからない。

「よくわからないですわ」

「あたしにもわかりませんわ」

「……本当に、困つているのですか?」

田を細めて、やや非難するよつてじおりんは語る。

「困ってるよ！ すげー困ってるよー。」

「やつは見えないのですけど」

「困ってるって！ だって、こきなり男の子になつたんだよ？」「

「常日頃から、『あー、男の子になりたい』って言つてたじゃありませんか」

痛いところを突かれた。

「そ、そりなんだけど。つて、それ母さんにも言われたしー。」

「なら、いいじやありませんの」

「うん……そりなんだけど……」

「なら、わたくしは帰りますわね」

席を立ち、リビングから去つてゆきつとするじおりん。

「えー、ちょっとまつてちょっとまつて」

あたしも続いて立ち上がり、彼女の肩をがつしつと掴む。するとじおりんは振り返り、あたしの顔を見つめてゆきくつと語る。

「わたくし、少し気持ちを落ちつけたいんですの」

「そんなに動搖してる？」

「ええ、かなり」

「ふうん……」

それは見えないけどなあ。

彼女の姿は、いつも通りの冷静沈着な姿そのものだ。

「まさか、朱音さんが男になるなんて……」

「やつぱりダメ？」

「ダメといつわけではありますが……、旦、悪いがありますわ」

やや言葉に詰まりながら、じおりんは言つ。

「そつか……」

「一番戸惑つているのは、あなたでしょつけど」

「やうなのがなあ、戸惑つてるのは間違いないんだけど」

「とりあえず話はわかりましたわ。でも、少し時間をくださいな

「う、うん」

透き通った目が、あたしを射抜く。

いつももなく優しく丁寧で、しおりんは語り続ける。

「落ち着いたら、また電話をかけますわ

「でも、そんなに戸惑つてる？」

「ドキドキです」

「ふうん……」

イタズラ心がふと心に芽生える。

その気配を察知したのか、あたしを警戒する彼女。

「ど、どうしましたの？ その眼は」

「いやあ、あたしが戸惑いをほぐしてあげようかなって

軽いスキンシップのつもりだ。

いつもやつてることだし、別におかしたことではない。

「え？」

しかし、まさかあたしが今、そんな行動に出るとは思わなかつたのか。

「えいっー！」

「あやあつー！」

突然あたしに胸を触られたしおりんは、物凄く可愛い声をあげた。何この子、女の子ってやっぱり可愛い。

「ふわふわだなあ、やっぱり

「や、やめっ」

頬を朱に染めながら、しおりんはあたしを振りほどこうと、必死に身体をよじらせたりしているけど、今のあたしの力は以前よりも強い。なかなか振りほどけずにいた。

「やめないよー やめないよー

「やめろって言つてるでしょー！」

すると、思い切り脳髄に、強いチョップを食らわされた。

「あーー！」

痛い。結構痛い。

本気で攻撃したな。

「わかつていますの、あなたは男。男なんですから、そういうことをするのは、もつやめてくださいまし。もし、誰かに見られでもしたら……」

「でも、中身は女の子だもん」

「調子が狂いますわね……」

はあ、とため息をつくしおりん。

「元気出た？」

とりあえず、何だかいつもの調子に戻つてきただように思ひ。先ほどまでのしおりんは緊張というか、戸惑いというか、驚愕というか、様々な負の感情が入りまじつているような、そんな雰囲気を漂わせていたけど。

「ええ。どこかのバカが、考える氣を吹き飛ばしてくれましたわ」「ひどいっ！ バカを強調するなんてっ！」

「とりあえず、出かけましょ！」

頭の中に不平を浮かべていると、しおりんがあたしの手を引いて、玄関まで歩いてゆこうとする。リビングの扉を開き、玄関へと至る廊下を歩く。

柔らかな手の感覚が伝わる。雪のように解けてしまったやうなほど、柔らかな手に引かれながらも、あたしは尋ねてみる。

「どこに？」

「美容院に行つて髪を切つて、それから、お洋服を買いましょう」「お洋服はとにかく、えー、髪の毛切るのー？」

「残念ですけれど、似合つていませんわ」

ふつ、とため息交じりに背中を見せながら、しおりんは語つた。

その背中に向かつて、あたしは問いかける。

「本当に？」

「本当だ」

「絶対に？」

「絶対に」

「ショックだなあ……」

結構お気に入りだつたんだけどなあ、この髪の毛。

性別が変わると同時に、さよならしなければいけないのか。

そんな奇妙な出で立ちだと、紗希ねえもびっくりしますわ

「そ、そう？」

思わぬ名前が出て、あたしは驚かされた。

彼女の姉、『紗希ねえ』はあたしたちの学年の一つ上で、先輩にあたる。

「はい。気持ち悪い、と言つと思ひますわ」

「そこまでかなあ……」

紗希センパイは、とても優しい人だ。

幻想的で目を離せば消え入りそうなくらい、ぼんやりとした人が、強い包容力を持つている。本当に優しく温かい人なのだ。

「人には、人に合つた出で立ちがあります。朱音さんのそれは、合つてませんわ」

「わかつた。紗希センパイが嫌がりそつなら、そうする」

「……そう、ですか」

「ん？ どうしたの？」

「何でもありませんわ」

「うん、それならいいんだけどね」

何やら、微妙な反応だ。

しおりんと、彼女の姉である紗希センパイは、昔からあまり仲が良くな。といふか、しおりんが一方的に嫌つてゐるよりも思つ。だつて、そう見えるんだもん。

何か理由があるのだろうけど、しおりんにそれを尋ねると、毎度はぐらかされるので、聞くのを諦めた。

でも、いい機会だから聞いてみよう、そう思つた矢先のこと。

「それから、学校にも行かなければいけないでしょう

「学校に？」

やがて、廊下を経て玄関に到着。タイミングを失つてしまつた。
そういうしている間に、しおりんはがちやりと玄関の扉を開き、
あたしと彼女は家の外に出た。

玄関の外、道路には、黒塗りの高級車が停められていた。
車のドア近くには、年老いた運転手さん。見知った顔のおじさん
だ。あれに乗つて、ここまでやってきたのだろう。

しおりんの姿を確認した運転手さんが、優美な動作でドアを開く。
しおりんとあたしは彼に軽く会釈を交わし、車の中へと乗り込んで
ゆく。

座席ふかふかだなあ。くそり、ブルジョワジーだなあ。
そんなことを考えていると。

「青木朱音（女）は転校したことにして、青木朱音（男）を編入さ
せなければならぬでしょ」

隣に座つたしおりんが、あたしの顔を見つめて語りかける。
でも、かつこおんな、とか、かつこおとこ、って。何だか、不思
議な気持ちだなあ。

「できるの？」

何はともあれ、今のままでは、あたしはただの不審者。
しかし、編入という体裁を取れば、正当なる生徒として扱われる。
そこを何とかしてもらつつもりで、最高権力者である、理事長の
娘しおりんに、緊急連絡をしたのだ。願つたりかなつたりなんだけ
ど。

「あの学校は、わたくし達、黒崎家のものです」

「そうだけど……つーん」

何だか、この期に及んで割り切れなくなつてきた。
そんな中、車はゅつくりと走り出す。

「朱音さん！」

あたしの戸惑いと悩みを乗せて進む車中、しおりんがあたしの目
を見つめ、語りかけてくる。

「はいっー。」

思わず、元気よく返事をしてしまった。

「あなたはこれから、男として、生きていかなければなりません」

「は、はい」

「元に戻れる保証は、一切ありませんわ」

しおりんの小さくも、しつかりとした声があたしの心の中に浸透していく。

その通りだ。

一生、このままかもしれないし、明日には戻っているかも知れない。

「ない……ね」

「もしかしたら、戻れるかもしれません。その時は、その時ですわ。あなたがそれを望むのかどうかは知りませんが、今は、男として生きる決意をしてくださいな」

少なくとも、今は。

男の子として、生きなくてはならない。

「不安、なんだ」

しおりんの優しい口調に、思わずあたしは心の内を吐露してしまつた。

嬉しさと、辛さの入りまじった微妙な感覚。

誰に伝えようにも、伝えることのできない胸の痛みと切なさ、そして楽しさと感動。

それが、不安を引き起こしていた。

「不安ですか？」

「うん。男の子になれたのは嬉しいんだよ？　でも、何だかこれからどうなるのかって、全然わかんないし、もやもやしたまだし」

これなら、あたしが好きな人にも告白できる。

うまくいけば、あたしはその人と付き合える。恋人になれる。

でも、とあたしは思った。

「嬉しいなら、よいではありますんか」

「そりなんだけど……」

「細かい事は、後で考えればよいのですわ
さつぱりと、しおりんは言い切つた。

「かなあ」

「面倒なことは、わたくしが処理してさしあげます。あなたは、わたくしの大事なお方ですから」

「そ、そり?」

「そう言つてくれるのなら、とても心強い。

さすが親友だ。

「……とにかく、わたくしに任せてくれますわね？　わかつたら、一人称を変えてくださいな。俺か、僕で」

「うん、ありがとう。しおりん。お、俺も頑張るよ
「お気になさらず。朱音くん」

ぱあっと、明るい笑顔を見せてくれるしおりん。太陽のような明るいこの笑みは、あたしの不安を吹き飛ばしてくれるように気がして、とても心強かった。

そして、あたしの呼び名は、朱音さんから、朱音くんになった。微かに希望が芽生えた、あたしたちを乗せた車は、道路を進んでゆき、あたしたちの運命をゆっくりと、変えようとしていた。

その後、美容院で髪の毛を整え茶髪はそのままに、ショートカットにした。

ちょっと後ろ髪を引かれる思いはあったが、しおりんが良いと言つたので、そのまま任せた。男物の服も、しおりんが一緒に選んでくれた。

代金は、今度黒崎家の大豪邸で住み込みの手伝い、らしい。
何度もかしたことはあるが、あれは手伝いといつ名の、遊びなのだ。
さすがに、ここまで気を遣つてもらつては悪い。でも、しおりん

は譲らなかつた。

ありがたいなあ。本当に、困っているときに助けてくれるのが、本当の友達だつて言つけど、しおりんは間違いなく本当の友達だなあ。

そして、学校に到着。

ここは、私立北宮学院高等学校。

共学の中高一貫校である、北宮学院の高等学校で、あたしはそこの一年生であった。

しおりんは中高の生徒合わせて総勢一千四百人から成る、『生徒総会』の副生徒総長であり、それなりに大変な雑用の日々を過ごしている。

生徒総会規約の前文には、こうある。

『北宮学院は黒崎の私有財産を運用して運営される学究施設であり、生徒の自主性を尊重し、生徒活動を主体的に行わせるため、生徒総会を置く。生徒総会は北宮学院理事会理事長の意思決定を補助する機関として置かれ、生徒総会の決定は、理事長の承認を経て、北宮学院の公式な決定事項として扱われるものとする。』

小難しいことが書いてあるが、内容は簡単だ。

簡単に言い換えば、生徒総会の力は強大であり、学内における理事長一家、黒崎家の力は、相當に強いということだ。あたしを何とかするぐらゐ、何といふことはないのだ。

時刻はもう放課後で夕方。

生徒の数はまばらで、茜色の夕焼けが校舎を包んでいた。

しおりんは、というと学校に到着して早々、面倒くさい書類の提出に、理事長室へと向かつていった。理事長といつても、自分の親なのだから慣れたものだらう。

あたしは、というと、部室にいた。

『英語研究会』。

構成員は総勢三人。あたしは諸事情から、正式な部員ではないのだが、暇を見つけては、こつそりと顔を出していた。

あたし、しおりん、そして、もう一人先輩がいる。

構成員はたつたそれだけの、ちっぽけな部活であり、英語研究会という名前なのに、英語を全く研究していないという、あまりにも愉快で、学校からクラブ活動費をせしめるためだけに、存在している部活であった。

それでも、楽しい日々を送っていたし、あたしは満足していた。
「はあ……」

たつた一人の先輩で、英語研究会会長。

英語研究会会長であり、しおりんの姉、紗希センパイ。

今はこの部室に居ないから大丈夫だろうけど、何の説明もしなければ、部室に居座る怪しい男相手に、口から泡を吹いて倒れてしまふかもしれない。

紗希センパイは、極端に人見知りをする人なのだ。

「どうなるかなあ……」

人見知りをするセンパイ、彼女は特徴ゆえに周囲から浮き、虐げられていた。

彼女の妹であるしおりんには言うな、と本人から固く口出しを禁じられていたので、そのことを話すことは一切なかつた。

それでも、あたしに優しく接してくれたので、あたしも出来る限り、彼女のためなら何でもしよう、と思い動いていた。

それでもいじめは決して止まず、問題は更にエスカレートした。その度にあたしは沈黙化に走っていたけど、結果はよろしくなく、暴力沙汰もよく起こし、退学騒動に発展したこともある。

そのとき、紗希センパイは『朱音ちゃんがいてくれたら、それだけでいい。関係がないのに、迷惑はかけられない』と語り、最高の

笑みを浮かべた。

どうしようもない。

この人を守つてあげたいけど、あたしじゃ無理だ。
彼女でもなく、家族でもない。肉親でもなければ、親族でもない。
あたしと、紗希センパイの間には、何の繋がりもなかつたのだ。
その時になつて初めて、あたしは男の子になりたいと思つた。
男の子になつて、紗希センパイと付き合えば。関係と繋がりを持つ
てば。

この人を助けてあげられる。そう、本氣で思い始めたのだ。

前々から口だけでは言つていたが、本格的に考え始めたのは一年
前の、その事件があつてからだ。

切ない。

切ない話である。

「はあ……」

ため息をつくあたし。

これからどうしよう。

紗希センパイは、本当に人見知りをする。

しかも、いじめられているからか、人を信用しない。信じられない
のだ。

このまま、編入して、英語研究会に再び顔を出したとしても、紗
希センパイと付き合えるのかどうか、それは最後までわからない。
好きな人いるのかなあ、わからないけど、いるなら難しいだろう
なあ。

あたし、根本は女の子だし。本職に勝てるのかなあ。
ハードルたけえ。純粹に、あたしはそう思つた。

しかし、さおりん遅いなあ。

そろそろ来てくれても、いい時間だと思うんだけどなあ。
そんなことを、思い始めたときだつた。

がちやりと、英語研究会のドアが開かれた。

過疎化しているこの部室にやつてくるのは、あたしを除けば一人だけ。

一人はもう学校にいないであろうと考へれば、残るのはしおりんのみ。

「しおりん、遅かつたねえ」

あたしは扉の方を見ずに、机にだらーっと、上半身を投げ出しながら言つ。

「……………」

あれ？

いつもなら、冷静な突つ込みが入るはずなんだけどな。

「どうしたの？」しおりん

もしかして、呆れてしまつたとか。

そういう感じなのだろうか。

心配になりながら、あたしは開け放たれた扉を見つめる。

そこにいたのは。

「あ……………」

思つていた、しおりんではなかつた。

そこに立つていたのは、どこか怯えた様子を見せる一人の少女の姿。

秋の稻穂のごとき金色が微かにかかつた、セミロングの艶やかな銀髪を、しおりんと同じリボンで、ポニー・テールにまとめいて、彼女の透き通つた眼は、赤ワインのようにワインレッドに染まっている。それに、可愛らしいメガネを装着しており、落ち着いた調子を演出している。

きめ細やかで色素の薄い肌の色は、穢れを知らない新雪の白を纏つ

ており、水晶の「」とく薄く、幻想的で、今すぐにも消え入りそうほどだ。

この人こそがもう一人の、英語研究会会員であり、会長。あたしが、紗希センパイと呼ぶ人間であり。

二年生の黒崎紗希、十六歳。

そして、あたしの想い人だ。

でもでも、どうしてここにいるのか。
時間は放課後、紗希センパイはきっと、もう帰つているものだと思つていた。

「紗希センパイ……どうして……？」

「だ、誰……？」

小さく可愛らしい声で、怯えを表現する紗希センパイ。やつべえ。

本当にまずい。

まさか、ここで彼女に会つてしまつとは。
全く考へていなかつた。

「あああ、あた、あたしは」「あああ、あた、あたしは」

動搖。

心臓がバクバクと激しい音を立て、リズムを刻み始める。

どうすればいいのか。どうしようか。

混乱で思わず、あたしと言つてしまつた。

余計に滑稽だ。余計に奇妙だ。このままでは、あたしはただの変態男じやないか。

「……」

小さな身体を更に縮まらせながら、紗希センパイはあたしの「」とを見つめている。

彼女にとつては、あたしは今までの『青木朱音』ではなく、『見知らぬ男』なのだ。怯えるのも無理はない。

「ま、待ってください！ 逃げないで！」

「こ、こないで！ 警察呼びますよ！」

だから説明しようと、紗希センパイに近づこうとするのだが。彼女は、ぶるぶる震える身体を収めるためか、両手で、ぎゅうつと胸の前に握り拳を作り、必死に怪しい男に抵抗しようとした。

「警察なんて必要ないですからー 全然必要ないですからー」

「つ……」

「えーと、その、えーと」

どうにかして、紗希センパイを信頼させないと、安心せないと。その手段として、何とかひねり出したのは、しおりんの名前だった。

「そうだ、生徒副総長が来ますからー 待ってくださいー！」

「あの子の……知り合いでですか？」

疑いの眼差しを向ける紗希センパイ。

うわあ、心に来るなあ。

せっかく、経験値を積み重ねてきたRPGゲームのデータが、一
夜にして吹き飛んでしまったような。

そんな切ない感覚がする。

「……はい、そうです」

でも、頷いておかないと。

今はまだ、自分が『青木朱音』であると、カミングアウトすることはできないし、カミングアウトしても、疑い深い紗希センパイのことだ。

信じてくれないだろ？

「……本当にですか？」

「はい。しおりんの、えーと、友達です」

やはり疑う紗希センパイのもとに、あたしはゆっくりと歩みを進めてゆく。

さすがにひょっとは信じてくれたのか、身体の震えは収まっている

た。

といつても、まだルビーのよう赤い目は、怯えの色が滲んでいたけど。

「そ、そ、なんですか」

必死に声を振り絞る彼女を見て、あたしは内心複雑な気持ちがする。

見知らぬ男と話すのは嫌だが、自分の妹であるしおりんの友達だから、無視するわけにはいかない。

そんな葛藤が滲みだしているのが、明白に見えていた。

「えーと」

この気まずい空氣。

一体、どうしたらいいんだろう。

戸惑う中、あたしは、ゆっくりと紗希センパイのもとへ、歩みを進める。

紗希センパイは小柄で、女の子であつた時からそつだつたけど、見下ろす形になる。

「な、何ですか？」

あたしを見上げながら、困惑の表情を浮かべる彼女。

「今度、この学校に編入してくることになつた、一年生の青木朱音つて言います。それでえーと、この部に入部させてもらいたいなつて、思うんですけど」

「あおきあかね……？」

疑問の表情を浮かべる紗希センパイ。

その顔はどこか疑わしげでありながら、何だか嬉しさを表現しているように思えた。

「はい。青い木に、朱色の朱に音です。あおきあかね」

一瞬、驚いたように目を見開いて、

「そ、そ、なんですか。あなたと同じ名前の子が、この部活にいるんです。……その子は、女の子んですけど、ね」

楽しげに、紗希センパイはどこか遠い目を浮かべながら、あたし

に語る。どうしてだろうか、女の子、の部分が強調されていたが、まあ関係のないことだらう。

「ごめんなさい、それ、あたしです。

それに、もういません。

「……何となく、あなたに似てるような気がしますけど。もしかして、『親戚とか?』

不思議そうに尋ねてくる紗希センパイ。

敬語だが、これはいつも紗希センパイだ。彼女は自分の妹に対しても敬語だし。

あたし相手にも、常に敬語だった。

「えー、あー、関係ないと思います。俺、知りませんし」

「……どうですか」

「はー」

出来る限り、ボロを出さないよつて語る。

そりやそうだよね。

紗希センパイが信じてくれるかどうかってなると、座ることこのになるし。

後々、タイミングを探して説明していけばいいや。

その時。

開け放たれたままの扉から、声が聞こえた。

「何をしてるんですの?」

「あ、しおりん」

「朱音くん、ちょっとこいつだ」

入ってくるやいなや、しおりんはあたしの手を掴み、部屋の外に出てゆこうとする。

そんな、こんな中途半端なまでは嫌だ。

「で、でも紗希セ……」

「いっちに来いと、言っているのです」

しかし、強く引かれる手の力に、

「ハイ」

あたしは、ただ従うことしかできなかつた。

「では紗希ねえ、また後ほど。早くお家にお帰りになつてくださいまし」

「……はい」

本当に姉か。紗希センパイは、目も合わせずじっくりと顔いで、部室内の椅子へと腰かけた。そしてあたしたちは、彼女に背を向けて部屋を出でゆく。

「行きますわよ」

黒崎家といふ、金持ち一家に生まれた姉妹一人。もう少し、仲良く生きられないものなんだろうかな。

廊下を歩くあたしとしおりん。

「どうして、しおりんはあんなに姉に冷たいのだろう。

「ねえ、しおりん」

「何ですか？」

「どうして、紗希センパイにそんな辛く当たるの？」

「女言葉、やめたほうがいいですわよ」

「う……どうして当たるんだ？」

「紗希ねえが、そう望むからですわ。それ以外の理由は、ありませんの。わたくしはシステムですから。決して、仲は悪くありませんの。仲は」

「……」

「いつもこうだ。」

この姉妹は「いつも」と、いつもあたしをはぐらかす。はぐらかして、答えを見えなくさせる。何か大事なことがあるなり、言つてくれればいいのに。

あたしたち、親友じゃなかつたつけ？

第一話『混沌とした学園生活の幕開け』

翌日。

あたしは、男の子になる前と同じクラスに、編入することになっていた。

男物のブレザーや、新しい学生証は即座に用意され、必要なものは全て揃つた。

さすが副生徒総長。さすが黒崎家。バックアップ体制は、完全といふわけだ。

「兵庫県の桜花学園高校から、編入してきました。青木朱音って言います。よろしくお願ひします」

ペニ、と黒板にチョークで名前を書き、お辞儀をする。学校名はでっちあげた。あしたたちの通う北富学院は関東にあるし、バレるわけがない。

「あー、仲良くしてやつてくれ。席はそうだな……」

「わたくしの隣に」

「わかった。黒崎の隣に行け、おいそこの列の奴らは、少しずつ前にずれる」

頭を上げて、周囲の人間を見ると、奇異と好奇の視線を送つてきていた。

「くそ、見世物じゃないんだぞ。

その中、不安そうにあたしを見つめる、しおりんの姿が何とも言えず、頬もしく、心強かつた。

父さんや母さん以外にも、あたしが実は女の子なんだ、という事実を知つている人がいる、あたしは、結構恵まれているのかもしない。

そして、あたしの男の子としての生活が本格的に始まった。

のだけれども。

ホームルームが終わり、ちょっとトイタレに行こうと思つた矢先のこと。

さすがに、これはしおりんに、つこて来てもいいわけにいかないしね。

「なあなあ

「んあ？」

「よう、よろしくな。俺は山岡だ」

早速、男に絡まれてしまった。

悪いことではないのだが、面倒くさい。
追いかけてきやがつた。

「はあ……よろしく、山岡くん

こいつの名前は、山岡雄太。

確か十五歳。

あたしたちの組の男子のリーダーのよつなもので、ちょくちょくあたしに絡んでいた人間だ。

嫌いじゃないが、うざい、という問題がある。

ちなみに、しおりんの友人ではある。

「呼び捨てでいいよ。なあ、お前、もしかして青木の親戚か何かか？」

「青木？」

あたしのことだらう。

あたしのことだらうが、知らないふりをする。

「ああ、知らないならいいんだけどな」

「誰？」

「青木朱音つて、お前と全く同じ名前の女がいたんだよ。何か、入れ替わりで転校していつたけどな。残念だ」

「ふうん。そいつが転校して行つて、寂しいとか？」

「ああ、寂しいな」

「へ、へえ」

まさか、あたしのことが好きだったとか。

そういう言葉が聞けたら面白そうだと、興味で聞いてみたのだが。意外に真面目な顔をして話すものだから、少しギャップで胸が躍つた。

「あいつとなら、本氣で殴り合いでできた。楽しかった」しかし、次の瞬間には胸の鼓動は消沈。

あたしは、山岡とよくガチの喧嘩をしていた。

「へえ？」

「まあ終わった話だな。何かの縁だろ、よろしくな。青木」

あー、きゅんとして損した。きゅん損。

やつぱり山岡は山岡だ。頭の中まで筋肉まみれの、バカだ。

「ああ」

「でもさあ、その青木は、俺のことをうぜえうぜえって、殴つてきただぜ。うざくねえよな、俺」

初対面の人間に、そんなことを話す人間は、ウザくないのか。

そんなことを思いながら。

「まあ、そんなこともあるんじゃないねえの」

「うかねえ」

「ああ」

軽く流してやる。

満足して去つていいくかな、と思つたらしつかりと横を歩いていた。

まさか、ついてくるつもりか。

「なんでついてくるんだよ」

とあたしが言つと。

「え? いや、連れショソ行こうと思つて」

けろりとした口調で、山岡は語るが。

「つ!」

頬が熱くなるのを感じ、あたしは思わず、山岡の横腹を思いつくり殴つてしまつた。

「こでえつ！ なんで殴るんだよー！」

「『』、ごめん」

「力つえーなあ、青木。一瞬氣が遠くなつたぞ」

「ああ……」

やつぱり、しおりんの時もそつだつたが。

あたしの力は、かなり強くなつているようだ。

山岡は身体を鍛えているし、よっぽどのことがなければ痛がらない。

「なんか、武術やつてんの？」

そう彼が疑うのも、当然のことだ。

「いや、何もやつてない」

氣をつけないとなあ。

下手すると、周りの人間をケガさせてしまつ。

「へえー。すげえな」

そんなことを話している間に。

男子トイレまでやつてきた。

正直ドキドキだ。ドキドキだけじ、一応、昨日予習しておいた。

大丈夫なはず。つまくできるはず。そう信じたい。

トイレの前に立ち、山岡に向かつて語りかけるが。

「……一人で行きたいんだけど」

「そんなこと言うなよ。行こうぜ、青木」

「ちよつ」

彼は、あたしの肩を抱いてトイレの中へと進入してゆく。

言つているとおかしな話だけど、現実は男同士なんだから、おかしなことはない。

あー、別におかしなことじやないんだりつけじ、あー、何だかもやもやする。

もやもやするなあ！

そして。

「どうです？男として暮らすところのは」

クラスメイトの質問攻めも終わり、授業も午前中のものは全て終え。

今は、昼休み。

屋上のベンチに座り、あたしとしおりんは、弁当を食べながら一人で話す。

山岡は振り払った。しおりんの名前を出したら、簡単に引いた。何故か知らないけど、あいつは妙にしおりんに優しいんだよね。

「疲れたー」

「初日に体育というのは、それはそれで大変でしたわね」

「そう！ それも大変すぎるんだって！ スプレー、スプレー使いすぎ！」

「体育終わったあの教室、凄くスプレーの匂いしますものね」「しなかつたらしなかつたで、すっげー汗くさいんだけどねえ……」

「なかなか辛いものがある。

動きまくるもんなん。そりゃ汗も出るよ、匂いもするぞ。

「匂いフェチに目覚めたのですか？」

そんなあたしを、じいと見つめるしおりん。

弁当を食べる手が止まってるよ。早く食べて、そんな話題する前に。

「そんなわけないだろー」

「そうなのですか」

「女の子の匂いなら歓迎だよ」

女の子の匂いは香水だの、コロコンだの、何だと批判されることも多いが。

あの匂いだつて人それぞれだ。いい匂いをさせている子は、いい匂いなんだ。

「おっさんくさいですわ

「すみません……」

べし、つと頭を叩かれた。

しおりん、もうひとつと乗ってくれてもいいのに。

「やうだ、じんな監せばいいへ。」

「どんな話ですか？」

山口と連れシミン行つた話

謝るはう、今のうちですつせんを置きにかく先生の筆

素晴らしい笑顔を浮かべながら、しおりんはあたしに言い放つ。

「はい。すみませんでした」

懇ろしい。

「ハジ食べるとき、元々何で汚い話をするんですか。信じられま

せんわ

「全く」

そういうえば、女子の間で何か話題あつた？

朱音さんが転校していった」とを、残念かる語も出でましたわ。

۲۷۰

作たる者

そう思った矢先のこと。

「その後すぐに、昨夜にあつたお笑い番組の話に、シフトしました

十五

「それはともかく、朱音くんのほう、人気ありましたわよ女子の間

で
」

何だが、しおりんはあえてスルリしたような

「マジでっ!」
「おたしのハ鏡かどこなのが
教えて欲しかったけれど

元気が胸の底から湧き起^ひいてくる。

女子相手に人気がある、それは嬉しいお知らせだ。

「田の色を変えないでくださいまし」

「はい……」

「カツコカワライイ、だそうです」

「えー、どっちなの？ かっこいいのか、可愛いのか」

中途半端だなあ。

どっちかにしてほしい。

「どっちつかずなんでしょう」

「ひどいっ！」

「まあ、悪評が立つよつはマシでしょ」

「悪評は何かあつた？」

「『可愛い子ぶつてて、ちょっとひげがない?』といつ評価が、クラスの某女子から

「俺は男だつづーの！」

正確には女の子だけど！

もう男の子だから！ その評価はおかしい！

「グループに属していな子の話ですから、気にしないほうがいいかと。基本的には、高評価ですわ」

「それでもなあ……」

「まだ動作に女性的な部分がありますから。そこは直したほうが良いでしょ」

「うー……」

直せるかなあ。

動作は、染み付いちやつてるものだしね。

「これから、何とかなりますわ」

「そりかなー……」

十五年間、女の子として生きてきたのだ。

女の子であるときは、動作が乱暴で男っぽいと言われたこともあるが、男の子の基準で見ると、やはり女の子っぽいのか。

難しいなあ。染み付いたものだし。

「そういえば、英研に入るのですか」

「うん。入ろうかなあつて。でも、前と同じ感じかなあ」

前と同じ感じじ。

正式なメンバーではある。

あるのだが、英研のメンバーであることは、他の皆には秘密になつていた。

そうしろと、紗希センパイに言われたから、そのようなふわふわな状態だった。

「なるほど」

「うつ、うん……」

「なら、前と同じように振る舞つてくださいな」

「わかってるよ」

あー、結局あたしは何もできないのかなあ。

しおりんの声を聞きながら、そんなことを思うのだった。

そして、放課後。

副生徒総長であるしおりんは生徒総会に出ていて、今は一緒にいない。

いつもそりこつそりと、昨日と同じ部室棟の一室にある、英語研究会の部室へと足を向けるあたし。

今日は昨日よりも時間が早く、人の数もそれなりに多い。

誰か他の生徒に見られてしまつては困るため、辺りをきょろきょろと警戒しながら、誰もいないタイミングを見計らつて、ドアを開いて中に進入する。

「誰もいないーか

昨日と変わらぬ部室。

ここに、あの人気がいた。

「紗希センパイ……」

何というか、あの人憚られたのは単純すぎる理由だった。

あの人は可愛いのもあるし、触れたら壊れてしまいそうな、硝子細工のような優しさを持っているし、性格も良く、一緒にいて心の安らぐ人。

でも、理由はそれだけではなかつた。

それは……。

「入部希望ですか？」

「ひやあっ！」

突然の背後からの声に、あたしは思わずその場で飛び上がってしまった。

「あ、昨日の……」

「い、こんにちはー！」

「……どうぞ、座つてください」

さすがに一回目なので慣れてくれたのか、引きついた笑みを浮かべながら紗希センパイは、手を差し伸べて、椅子に座ることを勧めてくれた。

「は、はい！」

「あの子のお友達ですか？」

「は、はあ」

萎縮してしまつ。

昨日はあんな騒ぎがあつたから、まともに顔を見ていいないし。

怯えが滲んだ笑みだったが、それでも他の女子の数倍可愛い。

「そうなんですか？」

「はい……」

「えーっと。この部活、英語は研究してないです。もしも、英語が

やりたいって言つのなら……」

「知つてます！」

「？ どうして？」

不思議そうに首を傾げる紗希センパイ。

英語研究会なのに、英語を研究していない。

なぜなら、この部活は、紗希センパイが中学生のときに作り、妹と一人でいるためにこじらえた空間だから。

「あ、え、えーと、しおりんから聞きました」

でも、正直に答えるわけにはいかない。

その事実を知ったのも、紗希センパイと打ち解けてからなのだ。

「ふふ。 そうなんですか」

「……」

「また、入部届書いてくださいね。えっと、改めて、自己紹介します。知ってるかもしないけど、黒崎紗希。一年生で、11月の誕生日です。他の誰よりも、あなたのことは知っています。

それでも、そのことを言に出すことが出来ない辛さに、あたしは胸の痛みを覚えた。

「……」

「どうしたんですか？」

そんな事情を知らない紗希センパイは、ただ首を傾げるばかりだつた。

「い、いえ。あた……俺の名前は青木朱音って言います。一年生で、昨日転校してきました」

「朱音くん、綺麗な茶髪ですね」

「はうっ！」

健気に笑いながら世間話をしようとする紗希センパイに、思わずきゅんとした。

何だこの可愛い生き物、彼女にしたい。

「あ、なれなれしかった……ですか」

「そんなことないです！ なれなれしいのはウエルカムです！」

「そうですか」

「まさか、髪の毛を褒められるとは思いませんでした」「一つものやり取りだ。

あの、楽しかった英研でのやり取りだ。
「髪の毛以外にも、いい所がありますよ」

「どこですか？」

「えーっと……」

真剣に悩みながら考える紗希センパイに、「
ないなら言わないでください」

あたしは思わず、いつもの調子で返してしまった。

「ごめんなさい。何だか、本当になれなれしくしてしまって
あ、ああ、そんなつもりで言つたんじゃ」

取り乱すあたしたち。

何だかぎくしゃくしているが、何だか樂しくて。

「……ふつ」

「笑つてないで、いい所探してくださいよー」

「そうだね……。田とか？」

これから先、うまくやつていけるような、そんな気がした。
「田なんて褒められてもなあ……」

「あの、朱音くん

「はい？」

「わたしを見ても、何とも思わないんですか？」

そんな中、ざわりと不穏な空氣が流れた気がした。

「可愛いですよね」

「そ、そうじゃなくてですね……」

「他に、何を思えばいいんですか？」

紗希センパイは戸惑っていたが、あたしには理由がわかつていた。

彼女の肌は色素が薄く、髪の毛も微かに金色がかつた白だ。
瞳は赤ワインのような色をしている。紗希センパイはカラーコン

タクトを入れているわけでも、髪の毛を脱色しているわけでもなく、外人であるわけでもない。

「それは……」

言葉に詰まる彼女。

「可愛いとしか、思わないです。俺は」

紗希センパイは、いじめられている。

正確には、存在しない人間と扱われている。

ほとんどの生徒からは、暴力を受けているわけではなく、腫れ物に触る扱いを受けている。いないように扱われ、友達もおらず、ひたすらに避け続けられてきた。

「……朱音くん」

女子のみならず、男子までもが紗希センパイを無視していた。そんな中で、物言わぬ紗希センパイを、面白がって物理的にいじめる女子も、男子も存在していた。

「まだ……会つたばかりですけど

ゆえに、彼女は孤立していた。

「朱音くんは、気持ち悪いって思わないんですか？」

「思わないです」

「この人が、悪いわけじゃない。

この人に、原因があるわけではない。

「そう、ですか」

「はい」

あたしは即答し続ける。

彼女の存在を肯定するように、あたしの存在を認めてくれた彼女に縋るように。

「……ごめんなさい。変なことを聞いて

「いえいえ」

「わたし、アルビノなんです。そこまで深刻じゃなくて、軽いものなんんですけど」

「へえー」

アルビノ、生まれつき身体の色素がない、もしくは薄い人間をそう呼ぶ。全世界どこでも生まれるもので、黒人にもアルビノはいるし、日本人も例外ではない。

「ただ、肌と髪の色も白いですし、目も赤いでしょう？」「ワインが飲みたくなりますね」

「あはは。面白いことを言いますね」

その容姿ゆえに、紗希センパイの存在は学内でも有名だ。その名前は中高に知れ渡っている。

有名だが、ほとんど会話に上がるのではない。

下手に会話に出して、この学校を取り仕切る理事長を刺激して、自分に不利益が降りかかることを、皆が嫌がるのだ。

しおりんの場合は、乱暴だが積極的に他人に関わろうとする。

だから、理事長一家の娘で、権力者であっても、友達の数が多い。

でも、紗希センパイは他人に関わろうとしない。

だから、状況が変わらない。変えようともしていない。

全てを諦めて、ただ流れる時間のままに身を任せている。早く、理事長にチクればいいのに。無理なら、しおりんに言えばいいのに。

それはともかく。

だから、英研には部員がない。

ここは紗希センパイのための、言うなれば聖域なのだ。

そうなってしまっている。

「何だか、朱音くん。何年も一緒にいたような、そんな感覚がします」

「え？」

「あ、いや、何だか、安心できるような気がするんです」

「俺ですよ」

「汐里の友達だからでしょうか」

「かもしだれないです」

それ以上に、あたしとあなたは数年も仲良くしてきました。泣いた顔も、笑った顔も、苦しんだ顔も、喜んだ顔も、まるで恋のよう見えてきました。

「これから、仲良くなれるでしょうか」

今まで培つたものを、全て放棄して。

「なります」

ここから、また全てを始めなくてはならない。

実はあたしが朱音なんだ、とカミングアウトするのは容易だ。「ふつ。なります、ですか」

しかし、無邪気に笑う紗希センパイの心は脆く、壊れやすい。そんなことを言つてしまつたら、何か全てが崩れてしまつようだ。あたしは、そんな気がしたのだ。

だから、そつと心の奥底に言いたいといつ気持ちを隠して、笑つた。

「はい」

「でも、朱音くん」

「はい？」

「この部室の外では、一切関わらないでください。部員である」とも、隠してください

「……」

予想通り。

紗希センパイも、しおりんと同じで。

「わたしはもう、誰かを巻き添えにしたくないんです」

「紗希センパイ、俺は」

「何も聞かないでください」

いつも、あたしの投げつける疑問をはぐらかす。昔からそうだ。

ずっとそうだ。ずっとはぐらかされ続けてきた。

「……紗希センパイ」

「わたしに関わって、いいことなんて何もないですか」「そんなことないです。どういうことなんですか」

「すぐにわかりますよ、理由なんて」

どうせ、理由なんて自分が爪はじきにわれていてから、あたしが迷惑を被ることになる、とかそんなものだろ？

「……」

でも、直接それを彼女の口から聞くことはまだ、できない。この時点のあたしは、そのことを知るはずがないのだから。簡単なことです。すぐに、わかります」

「そんなつ……」

「お願いします。わたしに希望を持たせないでください」

「希望……？」

何の話だ。

希望とは何か。

「わたしは、大切な人を失いました」

そう語る彼女のワインレッドの瞳は、どこか遠くを見つめているようだ。

もはや届かない思いを、心の底へと必死に沈めていたように見えた。

「え？」

「多分、その人は、わたしが関わりすぎたりとしたから、いなくなつてしまつたんですね」

小さく、淡々と、諦めの混じった声で紗希センパイは語る。誰の話をしているのだろう。

彼女の前から姿を消した、大切な人。

「誰のことですか？」

紗希センパイに、大切とまで言わせる存在。

あたしは思わず、嫉妬で胸の中が支配されてゆくのを、感じてい

た。

「昔のことです。ちょっとぴり、昔の話です」

「……」

でも、それを聞くことはまだできない。

男の子になつたあたしは、まだ紗希センパイと出会つたばかり。
そんなすぐに、深い話を聞くことはできない。

じれつたいけれども我慢しておかなければ、今後の交友関係すら潰しかねない。

やがて、紗希センパイは口元をゆるめて、安心したように笑う。
「じゃあ、それでお願いします。汐里とは、仲良くしてあげてください」

「はい」

「でも、本当に朱音くんは、朱音ちゃんに似ています」

「え？」

「あ、えっと、朱音くんに入れ替わりに、転校してしまつた女の子
なんんですけどね」

「ああ……」

紛らわしいなあ。

紗希センパイが語るのは、女の子のあたし。
彼女と今話しているあたしは、女の子のあたしではなく、別人だ。
実際は別人じゃないのだけれど、それを知っているのは、両親と
あたし、そしてしおりんだけだ。

「本当に、どこに転校してしまつたのでしょうか……」

「メールアドとか、携帯知らないんですか？」

まあ、答えはわかりきってるんだけど。

メールアドも携帯番号も、紗希センパイは教えてくれなかつた。

「……わたしが馬鹿なばっかりに、聞くことも、教えることも出来なかつたんです」

小さな声で呟く紗希センパイ。

しかしあたしは、一つ大事なことを考え付いた。

「でも、紗希センパイは黒崎家の人間ですよね。そこを何とかして、教えてもらえないんですか？」

もしも、紗希センパイがその辺りの情報を知ることが出来るのなら。

いざれ、あたしという存在の、むげなに気が付いてしまうだろつ。

転校先のはずの学校には、あたしは存在しておらず、同名の生徒が、あたしの転校と同時にこの学校に編入してきている。

そうなれば紗希センパイの不信は増大し、やがて信頼の崩壊につながる。

これから先の、紗希センパイを彼女にするための計画には、その辺りを詰めておく必要があった。

「わたしは、学校運営には関わってないんですよ。転校先を聞こうにも、汐里は教えてくれませんし」

「へえー初耳です」

心の中でガツツポーズを作る。

残酷なようであつたが、あたしにとっては幸運でもあつた。

「そうでしょう。出会つたばかりですからね」

「あ、は、そうですね！」

「それはそうと、朱音くんは、どうしてこの時期に転校を？」

「えーとですね……」

さて。

バレないよう、これから的生活、立ち回らなければ。

バレないように立ち回りながらも、しっかりと紗希センパイの好感度を上げる。

これは、かなり難易度の高いことだぞ。

でも、せっかく男の子になれたのだ。チャンスは生かさなければ。そんなことを考えながら、紗希センパイとやり取りを交わし、そ

して時間が経つてゆくのだった。

翌日。お昼時。

あたしは、色々と面倒くさいことがあって、しおりんとの昼食にて遅れた。

「ふう……よいしょ」

「お疲れですわね」

「ちょっと面倒くさいことがあってね」

「面倒くさこと?..」

きょとんと首を傾げるしおりん。そんな彼女を尻目に、あたしは彼女の隣にちよこんと座り、手に持っていた弁当箱を開く。

「ヤンキーに絡まれたんだ」

女の子であつた時も絡まれた。この学校はなかなかに治安が悪い。ところが、出る杭をとことん打とうとしてくる。

理事長の娘と共に行動する、茶髪であり、屈強な男。狙われないほうがおかしいのかもしれない。

「それは大変ですわ

「簡単に返り討ちにできただけど。ワンパンチワンキック」

上級生で、それなりに強いはずだ。

強いはずだけれども、あたしは簡単に倒すことができた。

「それは大変なことですわね」

「やっぱり、力が強くなってるなあ」

「前よりも、ですか?..」

「うん。ちょっと殴つただけで吹つ飛ぶし

あまりにもあつさりすぎた。

ちょっと、軽く小突いてやるひつと思つたら、思いつきり吹つ飛ぶんだもの。

もしも本気で殴つたら、空を飛べるんじゃないだろうか。もちろん相手がね。

「元々、暴力系でしたものね」

「おしゃれかな女子でいたかつたんだけどね」

「仕方ありませんわ。山岡くんと殴り合いをしているのですもの」

だなあ」

「鬼女神の青木、中学のころから有名でしたもの」「あのバカのせいでねえ」

事ある、一ひと、あたし

岡。 事あることに おたしかか二ノにからだい 級んでくるノ力

卷之三

「友達多かつたよ？」

卷之二

校にいた。

「あれは友達じゃありません」

「え」

「さあ、おまえの仕事は？」

「そうかなあ……」

「ナイフを持った強盗を、血まみれになりながら殺り倒した女。

「舍弟の数人や数十人できるに決まつてます」

でも、毎朝パンくれたし、ジュースもくれたよ?」「

「ハジカガれてたの、助けてあざたし

「みかじめ料ですわね」

はあ、とため息をつきながらしおりんは語る。

あたし自身は要求したことないし、自分自身がやりたいから、

助けただけだ。

もつと言えば、評判を上げて、紗希センパイにいい顔をしたいだけだった。それなのに相手の子たちはあたしを、用心棒のような存在だと、認識していたのだろうか。

「えー。違うよー、友達だよー」

何だかショック。

「そういうことにしておきましょ」

「しおりんは友達だよね？」

おずおずと尋ねると、

「さあ、どうでしょ」「う

彼女はくすりと笑い、自分の弁当箱の中から、可愛らしきしたこさんワインナーを箸でつまみあげ、口に中へと放り込んだ。

「そこは即答してほしかったなあ

「悪友みたいなものですわね」

「そつかー」

何だか安心。

あたしつて、単純だなあ。

「そういえば……、昨日は部活行きましたの？」

「うん。行つたよ。紗希センパイ可愛いよねえ

単純だよね、あたし。

「のろけ話は結構です」

「のろけじゃないよつー」

「はーはー

さらりと流されてしまった。くそつ。

「のろけたいんだけどなあ

「紗希ねえは、攻略難易度が最高ですわよ

「そうだよね……。応援してよ、しおりん」

「前にも言つたでしよう。わたくしたち姉妹は、基本的に相互不干涉。彼女がそう望むのですから、わたくしは妹として、関わるわけにはいかないのですよ」

何だかよくわかんないけど、しおりんは自らをシスコンだと呼ぶ。シスコンだからこそ、姉の命令は絶対で、決して逆らわないのだといふ。本当に、紗希センパイはそれを望んでいるのだろうか。

「うーん……わかんないなあ……」

聞いたところで、きっと彼女は答えてくれない。

そんな状態を、何年も繰り返していたのだから。

「まあ、難しい姉妹なのですわ」

「難しそぎだよねえ」

「まあ……」

いつも通りのやり取り。

そんなものを交わしていると。

「オラア！ 青木！」

屋上の扉が勢いよく開け放たれ、包帯を巻いた金髪のヤンキーがあたしを思いつきり睨み付けていた。その後ろからは、四人五人の同じような量産型ヤンキー。

「あー、さつきの先輩方」

「あー、じゃねえよ。よくもやつてくれたな！」

めんぢくさいなあ。

「朱音くん、これは……？」

「さつき倒したヤンキーさん。……後ろにいて、絶対に前に出ない

で」

「は、はい……」

立ち上がるひつとするしおりんを制止しながら、あたしはゆっくりと弁当箱を、怯えている彼女に手渡し、すくと立ち上がる。

「転校早々女連れなんて、良い身分じゃねえかよ」

「一人じゃ勝てないからって、群れを組んでボコりにきたんですか

ヤンキーは、仲間を呼んだ！

「うるせえ、転校生の分際でよおー！」

しかし、全員雑魚だつた！

「早く来いよ、雑魚ども」

どうせ、そんなオチが見えてる。

あたしがイヤラシイ笑みを浮かべて、一斉に殴りかかる。

「つ……！」

「おらあつー！」

まず一人、動作が大振りだ。

するりと身体を避け、一発腹に重いものをぶち込む。

「当たつてないですよ」

「かはつ……」

その場に崩れ落ちる、量産型ヤンキー先輩一号。

まず一人、ノックアウト。いとも簡単に潰してくれた。

その様子を、最初に喧嘩を売ってきたヤンキー先輩が、包帯まみれの身体を震わせながら、睨み付けていた。

「青木つ……！」

「ほんと、群れても雑魚ですね」

何ということはない。

今のはたしは、この学校で最強と言つても過言ではない。

それは言い過ぎかもしれないけれど、この場では最強だった。

「あれ？ もう来ないんですか？」

いとも容易く一人目をのしてしまったことで、他のヤンキーたちは萎縮していた。

なあんだ、面白くもなんもない。挑発しても、乗つてこないのかなあ。

そう、たかをくくつていると。

勇敢な包帯ヤンキー先輩が、猪のようにも猛進してくれる。

「青木いつ！」

「そう来ないと……なつ！」

単純だなあ。

簡単すぎるなあ。

大振りな動きをはつきりと見切つて、あたしは軸足をしつかりと地面につけて、蹴りを先輩の脇腹に入れる。

「がつ……！」

瞬間。

崩れ落ちる身体。

骨のきしむような音。

自分でも、恐ろしくなった。

男の子になつただけで、ここまで威力が変わるとは。

気絶して、地面で伸びている包帯ヤンキー先輩を見つめながら、あたしはそんなことを思った。

「まだやるんですか？」

しかし、感情を隠しながら、抑揚のない声で言葉を紡ぐ。

「お、覚えてるよっ！」

すると。

ヤンキー先輩方は、あたしに敗れた一人を回収し。

捨て台詞を吐き捨てつつ、そそくさと退場してゆく。

なんだ、他の人たちばびびつてしまつたのか。

面白くないなあ。

「大丈夫か、しおりん」

「え、ええ……」

「何かされたら、すぐに言つてくれよ。ぶつ殺しに行くからぞ」

「わたくしを誰だと思ってるのです。生徒総会を実質的に取り仕切る、生徒副総長で、黒崎の娘ですわよ」

「」の学校において、生徒総会の権限が強いのには、理由がある。黒崎家の人間を、次の経営者として育成するために、副生徒総長として配置しているのだ。全ての議論は、副生徒総長の承認を経なければ、成立しない。

責任は全て副生徒総長のものとなり、損害が発生すれば、いくら

黒崎家の人間といえ、損害賠償を請求される。その中で順調に運営を行っているのが、このしおりんだ。

副生徒総長の資格には、黒崎家の人間であり、中高の生徒であることが求められる。紗希センパイにも資格があつたらしいけれど、そこら辺の事情は話してくれない。

「はは。それもそうか」

いつかは話してくれるのだろうか。
でもやつぱり無理かなあ。

「でも、本当に男の子になってしまったのですわね……」

「ん？ そうだなあ

他のことをぼつと尋ねていると、しおりんもぼつとした表情を浮かべていた。

「何だか、実感してしまいました」

「嫌なところで実感しちゃうんだ……。やつぱり嫌？」

「いいえ、そんなことはありませんわ

「かつこいい？」

「そ、そんなことはありませんわね」

何だか、頬を微かに染めてふい、と逸らすしおりん。

「ちえつ」

まつたりとした時間が流れている。

歴史を流れる時のように、ゆっくりと、変わらない関係は少しずつ変わり始める。

あたしの行動、彼女の行動、誰かの行動が、ほんのちょっとぴりすれ違い始めて、大きな転換の訪れを待ちわびていた。

放課後。

しおりんはいつも通りに、副生徒総長の仕事に出ている。お疲れなことだ。

だから、今日もあたしは、紗希センパイと一緒にゆっくりと話し

ている。

「朱音くん、喧嘩したんですか？」

「げつ、何で知ってるんですか？」

思わず、げえつとか言ってしまった。

まさか、紗希センパイがもう知ってるなんて。

もしかして、案外広まっている話なのかも。いやだなあ。

「風の噂、です」

「ああ……えつと……まあ」

「喧嘩はよくないですよ」

「はあ。でも、売られた喧嘩だったんで」

いきなり、絡まれたのだ。絡まれたから、倒した。

あたしがやつたのは、たつたそれだけのことだ。

「停学、させられますよ？」

「大丈夫ですよ。副生徒総長が味方なんで」

「あの子は、優しく見えて厳しいですよ」

「そうですかねえ」

確かに、厳しいところもあるが。

基本的に甘々だ。口調と行動が一致していない。

厳しいことを言つておきながら、宿題を見させてくれるような子だ。

甘い。

「はい。ですから、もう喧嘩はやめてくださいね」

「ういーっす。紗希センパイが言うなら、もうやめます」

自分から絡みにいくことはないし。

今度絡まれたら、絶対言わないように口止めしておこう。

すると、自分の主張が受け入れられたことに満足したのか、紗希

センパイは口元を微かに緩ませて、こちらに微笑みかけてくる。

「いいこ、です」

「今の表情、やばかつた。

天使のような顔。

いや、女神以上の顔だ。

首をわずかに傾げて、ふわりとした髪を揺らし、満足感を周囲に振りまいた紗希センパイの笑顔が、あたしの胸の内を可愛さの矢で射ぬく。

思わず、口クつてしまいそうになる。のを、必死に抑えて、言葉を紡ぐ。

「そ、そうだ、紗希センパイ」

「はい？」

「今日、ゲーセン寄つてきません?」

「一緒にいるのを見られるのは、ちよつと」

案の定渋った。

でも、あたしは強引に誘いを続ける。

「大丈夫ですって。現地集合つて感じで」

「……それなら」

以前も、このやり方なら通用した。

北富学院の生徒は、いわゆる不良層しかゲーセンに行かない。

真面目つ子の多い学校であり、ゲーセンの中に入ってしまえば、一人でいることを、噂のタネにしそうな一般生徒はない。

不良層の生徒は、あたしを含めて、そんなくだらないことに興味がなかつた。

「決まりー。じゃあ、駅前のゲーセンで」

「はい。でも、あそこは怖いですよ?」

「大丈夫ですよ、ぶん殴ります」

「ぶん殴る……?」

「パンチングマシーンをね、パンチングマシーンを」

「なるほど……? でも、あつたっけ……」

「あたし、先に行つて、お金集めてますね」

ゲーセンには、他校の不良や、調子に乗つた一般人もいる。

殴られて力ネを盗られそうになつてゐる人間を助け、用心棒代として、僅かな資金をいただく。これがあたしのプレイスタイルだった。

「え？」

しかし、これは女の子の青木朱音がやつていたことで。

今のおたしは、遙か西の兵庫県から来たばかりの、異邦人だ。

「あ、い、いや、何でもないです」

「何か、悪いことをしようとしてませんか？」

目を細めて、疑いの視線をあたしに向ける紗希センパイ。

紗希センパイにも、危ないからやめろと言っていたことだが。目の前で困っている人間がいるのに、無視するようなことはあたしにはできない。

お金だって、無理にもらつたわけじゃないし、相手がくれる、と
いうからもつただけだ。悪いことは何にもしていない。

「やだなあ、そんなわけないですよ」

「……そうですか？」

「は、はい。じゃあ、先に行つてます」

とにかく、ここに留まりすぎるのはまずい。

何だか、色々とボロを出してしまいそうだし。
鞄を持ち、さつさと出立の準備を進める。

しかし。

「わかりました。すぐに行きます」

紗希センパイも、何か決意じみた表情を浮かべて立ち上がる。

え？ まさか？

「ゆつくりしてもいいですよ」

「いえ、放つておくと、とんでもないことになりそうなので。やつぱり一緒に行きます」

今まで、こんなことは一度もなかつた。

「えー」

そつは言ひながらも、あたしは嬉しかつた。

この部室の外では、会話も交わさないし目を合わせることもない。それなのに今は一緒に、共に、歩んでいくことができる。

どういう心境の変化か、紗希センパイは彼女が守ってきた大原則

を、『とんでもない』となりそうだから』といつ理由で、破つた。

「……えー？」

「な、なんでもないですー！」

「よろしく」

「ちえー……」

まあいつか。

嬉しいし。

そして、あたしと紗希センパイはゲーセンに到着した。外見からは退廃的な雰囲気は漂つておらず、中も普通のゲーセンと変わらない。

ただ違のは、一定の時間になると、かつあげチンピラが出現するところだけだ。その時間が近づいている。

もしも、紗希センパイに手を出したらぶつ殺す。割と本気でやる。

「あ、紗希センパイ」

「はー?」

とりあえず、紗希センパイを楽しませてあげよう。

「UFOキャッチャーでもやりませんか?」

「やりましょー!」

「計画通り

彼女は、UFOキャッチャーが得意で、ゲーセンで一番好きなゲームだと語っていた。

せうやつて配りして、ちょっとずつポイント上げていかなないとね。

「はい?」

「どうしたんですか?」
「何でもないです。やつましょーはくせんじょーあやつましょー

まあ、そんな事実を今あたしが知るわけはない。

「う

「どうしたんですか?」
「何でもないですよ」

転校していつたはずの、青木朱音（女）だけが知ることなのだ。

「……何だか気になりますが、まあいいでしょう」

「はい。奢りますよ」

「いえ、悪いです」

「いいからいいから」

「あ……」

「頑張って、取つてください。えーっと、ほら、あの黄色いくまさんのぬいぐるみとかどうですか？」

「あれ、取らうと思つてました。凄いですね、朱音くん」

「いやあそれほどでも」

趣味嗜好、どんなものが好きで、どんなものが苦手なのか。あたしには彼女の方向性が手に取るようにわかる。だから、どんなことを考えているのかも、ある程度のことならばわかる。だって、好きなんだもの。

「じゃあ、頑張ります」

小さくガツッポーズを作り、にっこりとほほ笑む紗希センパイ。ほわあつとする。ほわあつと。

「頑張つてください」

「はい！」

さて。

紗希センパイは目の色を変えて、全力で、真剣そのものの表情で、UFOキヤツチヤーに向かつた。これからしばらくな、黄色いくまさんのぬいぐるみを獲得するために、全神経を集中せねばなり。その間は、あたしにフリー タイムが出来る。

じつそりと、ばれないようにそろそろそろそろ、と足を動かし。

ゆづくつと、歩き始める。

しつかりと、紗希センパイの動向は監視している。しているが、それよりもまず、面倒なチンピラの掃除が大切だ。

「さーてと……」

最近は、あたしが掃除していたせいで、なかなか安全な場所になつていたし、もしかするともういなくなつてしまい、別の場所にターゲットを求めに行つたのかもしない。

それなら、それでいい。見つけ次第、そこでも掃除するだけだ。あたしの人気が上がるなら、紗希センパイの耳に入るのなら、どんな危険だつて冒す覚悟はあつた。

「おおつと」

いなかなあ、と辺りを見渡していると。

いた。トイレの入り口の影、多くの場所からは死角になつているところに、金髪のいかにもなヤンキー二人組があり、にやにやと氣弱そうな男の子に話しかけている。

話しかけている、というよりも、脅しかけている。という表現のほうが正しいか。

さて。

とりあえず、振り向いて、紗希センパイがこちらを見ていないか確認。

大丈夫だ。熱心に、黄色いくまさんを取ろうとしている。周囲の様子なんて、知つたことかつて感じに。これなら、すぐに終わらせればバレないだろう。

よし。

やるか。

そう決心し、あたしはゆっくりと彼らに近づいてゆく。

そして。

「ありがとう……」「ありがとうございます」

ペコペこと頭を下げる男の子。

そして、地面に転がるヤンキー一人。

しゃがみこみ、彼らのポケットから財布を抜き取り、中身を確認。わあ、結構入ってるなあ。

「いやいや、気にしなくていいから。で、いくら取られたんだ」「一万……」

金持ちめ！

とりあえず、ヤンキー財布から一万円を取り出し、彼に渡す。その一割でもくれたらなあ。くれないかなあ。淡い期待を浮かべるけれども、まあ無理だらう。

「はい、危ないなあと思つたら逃げろよ」

「ありがとうございます！ えっと、お名前は？」

「青木朱音だよ。いつこには転校してきたばっかなんだけどな」

「朱音わあ~」

「へ？」

さあ？

どうしてさあ呼ばわり？

「い、いえ、朱音さまといふ喧嘩の強い女性がいて……」

「あー、うん。知り合いでもないし、関係者でもない」

「やうですか……」

まさか、そこまで名前が知れ渡つていたとは。狙い通りといえば狙い通りなんだけど。

「違う違う」

「そつなんですか」

あ、やばい。

紗希センパイが、もつこFのキヤツチャーを終えてこいつらを見ている。胸元には黄色こくまわんのぬいぐるみ。そして瞳には、疑いの色を滲ませていた。

「ああ。これからは気を付けるんだぞー」

さつさと別れてしまわないと。

「はい！」

あーあ、収穫なし。

ヤンキー財布から抜き取つてもいいけど、それやつてもなあ。

ため息をつきながら、財布をまだ倒れているヤンキーの身体の上

に投げ出し、ちょっと残念な気分になりながら、紗希センパイの元へと歩いてゆくのだった。

歩いてゆくのだが。

明らかに、怒っている紗希センパイ。

怖い。真っ赤な瞳が、あたしを射抜いている。
あーあ、バレてる。絶対バレてる。やだな。

「朱音くん？」

「ハイ」

「何をしてたんですか？」

「ヒーローじっこです……」

「危ないでしよう」

透き通った水晶の声が、頭に浸透する。

「その通りです」

「……本当に、気を付けてください」

「ハイ」

でも、あたしは嬉しかった。

まだまだ見知らぬ関係だけど、紗希センパイがあたしを心配してくれた。

それって、結構な収穫だと思つ。

「もしも、朱音くんが誰かにいじめられたら。心配してるんですよ」

「へ？」

あれ？

何だか、紗希センパイの瞳には涙が浮かんでいる。

どうして、あたしがいじめられるなんて、ファンタジックなことを言い出すのだろう。

「ああいう人を攻撃して、目をつけられたらどうするんですか。転校とか、しないといけなくなるんですよ」

「大丈夫ですってば。俺、やり返せますし」

「そうは言いますけど……」

何だか、まだまだ言いたそعداً。

しかし、今はそんな話がしたいわけじゃない。

さつと話題を切り替え、さつと紗希センパイの手を取り、「ほり、紗希センパイ。次のゲームやりましょっよ。そんな面白くない話は、やめておきましょ」

さつと歩きだす。

せつかくの機会なんだから、遊ばないとねー。
お金はないけど、ちょっとくらにはあるしー。なんとかなるぞー。

時間が経ち、夕陽はもう水平線の向こうに消え、外はもう薄暗くなっている。

「そろそろ帰りましょうか、紗希センパイ」

そのまま紗希センパイを一人で帰すわけにもいかないし、彼女を家に送つてあげなければ。そう思つただけれど、紗希センパイは自分の家の場所を、あたしに教えてくれるだろうか。

「はい。帰りましょう」

「送つていきますよ」

「あ……えつと……」

まあ、予想通り。

彼女はばつが悪そうに、辺りをきょろきょろと見渡している。

「どうしたんですか?」

「送つてもらうのは悪いので……」

他人に干渉したがらない。させたがらない。

そんな紗希センパイだから、きっとわざわざつと思つていた。

「気にしないでください。危ないでしょ、もう夜も遅いし

「えつと」

「嫌ならいいんですけどね、嫌なら、悪いですし」

しかし、頑固ではあるが、突破口はある。

申し訳ないという気持ちもあるが、彼女の罪悪感を利用するのだ。

「そんなことはないです。お気持ちはありがたいのですけれど……

「じゃあ行きましょ」

「うーん」

「強引ですね、朱音くん」「よく言われます」

予想通り。

こうすれば、紗希センパイの心にゆっくりと近づいてゆける。そして、あたし達二人は、ゆっくりと帰路につく。紗希センパイ、黒崎家の家は街の外れにある大豪邸だ。数回かお邪魔したことはあるが、とても窮屈で、とても重苦しい雰囲気が漂っていた。歩いていると、紗希センパイがあたしの横顔を見つめながら、語りかけてきた。

「ほんとに、そっくりです」

「その……転校していつたつて人に、ですか？」

「はい。よく喧嘩してて、それこそ、不良さんたちと戦つてました」

「はは……」

自分のことだもんなあ。

何だかむずむずするなあ。

「でも、格好良かつたですよ。髪も染めていて、周りの人たちには不良女だと、言われてましたけど、わたしは好きでした」

「へえー」

不良女！

あたし自身は、おしとやかなレディーのつもりだったのに…ありえませんわ、としおりんが突っ込む声がどこかで聞こえた気がする。気がするけれど、あくまで気のせいだ。

てか、染めてないよ！ 地毛だよ紗希センパイ！

「そういえば、朱音くんは、汐里の彼氏さんなんですか？」

「ぶつ！」

「あ、図星でしたか」

「違います違います。えっと、友達です。友達。親友」

「朱音くんは、どちらの出身でしたか」

「えーっと、生まれはこっちなんですけど、育ちは兵庫です」

「それは遠いところから」

「ええ……まあ」

「何だか、バレてるような気がする。

いや、バレてたら怒つてるか。バレてないよなあ。

「どうして、汐里と仲良くな？」

「う、うーん……チャットです、チャット」

「なるほど。チャットなんですか。イマドキですね」

「はい、そうですそうです」

「なら、知ってるかもせんね」

夜の闇の中、紗希センパイはゆっくりと口を開く。一体、何を語るつもりなのだろう。

「何がです？」

「汐里、副生徒総長なんですよ」

「ああ、はい。聞きました」

とつぐの昔に知っている情報だった。

「副生徒総長って、選挙で選ばれないって知つてましたか」

「こちらも、昔から知つてている。

でも『黒崎の人間が、副生徒総長となる』以外は、一般生徒が理由を知ることはない。聞こうと思つたこともなかつたし。

「それも……聞きました。でも、理由がよくわからなくて」

「黒崎の人間が、本家筋分家筋関係なく、副生徒総長に就任するんです。それで、将来の経営の勉強をさせるんですよ。生徒総会の権力が強い理由は、そこなんです」

「ああ……なるほど」

そんなカラクリだつたのか。

うちの学校は、本当に生徒総会の力が強い。その理由は、経営勉強のためか。

黒崎家は分家が日本中につくつ数が多いらしいし、次から次へと子供が生まれるから、副生徒総長の欠員が出ることもないんだろう。

「久しぶりの本家筋の副生徒総長、それが汐里です」

「大変ですよねえ」

分家に負けられない、それが本家としての意地だろ？。しおりんのことだし。

「ええ。プレッシャーでしょうね。もしも、上手に運営できなければ、黒崎の当主に選ばれませんから」

でも、だ。

本家筋の人間は、しおりん以外にもいる。

「でも、それなら紗希センパイにも資格があつたんじゃ？」
そう、紗希センパイも本家の間で、しかも長女だ。
資格ならば、紗希センパイのほうにあるのではないか。

しかし。

「わたしは、お爺様達……偉い人たちに、『白子は不要だ』と言わ
れましたので」

全てを諦めきった笑みを浮かべ、紗希センパイは語った。
白子、アルビノというだけで、存在が否定される。

「そんな……」

あんまりだ。

そんなの、どうかしてる。

「わたしは、あの子に迷惑をかけたくない。ただ、学校の運営だけ
に全力を使わせてあげたい。ただ、それが出来れば満足なんですよ
」「そんなのってあんまりじゃないですか。紗希センパイが悪いとか、
そもそも、外見がどうとかなんて、運営するのに何の関係もないじ
やないですか」

思わず熱っぽく演説をふるうも。

「でも、それがルールですから」

たつた一言で、切り捨てられてしまった。

「……あんまりですよ」

この問題が、姉妹の仲をややこしいものとしている。

その事実を、知ることができた。

あたしは、この思わぬ収穫に、何だか得体のしれない期待感と。

「優しいんですね、朱音くんは。すみません、何だか面白くない話

をしてしまいました。さあ、帰りましょ「う」
どうしようもない、絶望の壁のようなものを感じるのだった。

第三話 「もしかして、一緒だったの？」

コピングで、ひつたつと朝の時間を過ぎる。

「旦元氣に頑張るためには、朝はしつかりとしておかないとね。

「そういえば、母さん

「どうしたの？」

テーブルで、あたしさ母さんと一緒に食事をとる。パジャマはもう男物だし、化粧もやめた。髪の毛はぱっと整えるだけで、朝の余裕がかなり生まれた。楽だなあ。

そんなことを思いながら、母さんに話しかける。

「その、性転換？ の申請つて終わつたの？」

「終わったわよ」

「じゃあ、あたしひてもひつ男の子？」

「そうなるわね」

「そうなんだ……」

何だか、改まつて考えてみると凄い話だなあ。

「まあ、頑張りなさい」

「あつわつ言うなあ。あれ、父さんは？」

「有給使つたから、溜まつた仕事を片付けるつてもひつ出でこつたわ

「そうなんだ」

父さんはそれなりに忙しそうに会社へだ。

「そういえば、母さん

「ん？」

父さんの名前が出たので、ちよつと聞いてみよつ。

今まで、勇気がなくて聞けなかつたことだ。この機会だから、聞いてみよつ。

「父さんは、その、どうして付きましたの？」

「どうしてそんなことを聞くの？」

どうして聞いてしまったのか。

その意図は自分でもわからなかつた。

「いや、その……えつと……」

でも、気になつてしまつたのだ。

「女の子が好きだつたのに、どうして男と付き合つたのか、つて?」

「……うん

母さんも、あたしと同じで女の子が好きだつた、らしい。
だから、カミングアウトする勇氣も出たし、だから母さんは、あ
たしが紗希センパイとくつづけるように、応援もしてくれていた。
でも、どうしてだらうか。父さんと付き合つて、そしてあたしが生
まれた。

何だか、矛盾なようなものを覚える。父さんが中性的な顔つきだ
から、妥協して結婚したとか、そういうものなんだろうか。

「気になる?」

「気になる」

「教えてあげない」

「えー!」

ペロ、と舌を出して悪戯っぽく笑う母さんに、思わず拍子抜けし
てしまつた。

「いつか、教えてあげるわ

「むう……」

ほんのちよっぴりの勇氣を出して損した。勇氣損。

テンション降下気味のあたしに、母さんは微笑みかけ。

「でもね、朱音。一つだけ覚えておきなさい」

ゆっくりと、口を開いた。

「人を好きになることに、権利なんて必要ないの。好きになる権利
がないとか、好きになっちゃダメだと、そんなことは考えちゃだ
めだからね」

「……どうこつこと?」

母さんの言葉は、深く、意味が大きそつなもので。

自分に言い聞かせるよつたな、そんな自戒の念を込めたよつた言葉

だった。

「思いは伝えるもの。心の中で押し殺すものじゃないわ」

「母さんも、伝えたの？」

「ええ。伝えたわ」

伝えた。

「そしたら、どうなったの？」

「さあ、どうなったんでしょうね」

でも、結果は目に見えている。

断られてしまったのだろう。想い人である少女に告白し、断られ

た。

「……」

それを深く掘り下げる勇氣は、あたしにはなかつた。

それを望んでもいないだろつ。

「後悔はしないわ。信じてたから」

どこか、吹っ切れたような笑みを浮かべながら、母さんは語る。

やりきつた人間の顔。想いを伝えきつた人間の顔。

失敗したのに、朗らかな笑みを浮かべ、過去に想いを馳せている。

「そう、なんだ」

「ほら、早く食べちゃいなさい。早く洗い物したいのよ」

「……うん」

あたしも、伝えておくべきだったなあ。

あれだけ差が縮まつていたのだから、女の子であるときにも、紗希
センパイに告白しておるべきだったなあ。

これから取り返していかないと。あたしにはまだまだチャンスがある。

がんばろう。

そして、あたしは迎えに来たしおりんと一人で、歩いて学校へと向かう。彼女は普段車で通学していない。出来る限り、他の生徒と

同じ環境で育てるというのが、黒崎の方針らしい。

「あー、女の子になりたい」

思わず、あたしは隣のしおりんに愚痴をこぼす。

「はいはい」

「だつてさあ、しおりん。聞いてよ」

「女言葉」

即座に、しおりんから修正が入る。

「聞いてくれよ」

「はい」

「紗希センパイと、あと少しで付き合えてたかも知れないんだし」

「隣の芝は青いですわね」

「うつ…… そうだけど」

厳しい指摘だなあ。

もうちょっと、オブラーートに包んでくれてもよかったですのに。

「そんなことを考えている間に、まず環境に慣れてくださいませ」

「慣れないんだよなあ」

女の子社会でいるときは、また違った環境がある。男の子社会は、女の子社会よりも単純で、頭を楽にさせられるけど、まだまだわからないことも多いし。

「とは言いながらも、クラスの中心になつたじやないですか」

「まあ、そうだけど。山岡いるし」

あのバカ、山岡。

結局、あいつはあたしが転校前したじとになつていると、何一つ変わらない状態に戻つた。つまりは悪友ポジションだ。

「その適応力が、朱音くんの強みですわ。これから、紗希ねえとも仲良くなつていけますわよ。昨日、ゲーセンに行つたのでしよう?」

「うん。行つたけどね」

「わたくしが、副生徒総長の仕事をこなしている間に」

「い、ごめん」

痛いところを突かれてしまった。その通りだもんなあ。

「お気になさり。そういうこともありますわ」

「あはは……」

「紗希ねえは、笑つていましたか」

あたしの顔を覗き込み、しおりんは尋ねる。

「うーん、まだ固いなあ」

「そうですの」

「そりや、そんな簡単に心を開いてなんて、くれないって
むしろ、簡単に心を開かれたら」

あたしの、女の子としての数年は何だつたんだ、とこう話になる
し。

「まだ一週間経つていませんわ」

「だよなあ」

「これから、ゆっくりと前に進めばよいのです」

「そうだなあ。でも思つただけじゃ、しおりん

「はい?」

「また、近づきすぎたら女の子に戻るんじゃないかつて。そうなっ
たら、今まで積み重ねてきたものは全部なくなるだろ?」「
そういう不安が心の中にある。

あたしは、ある日突然男の子になつた。

といふことは、逆が起つたつて、何の不思議もないのだから。
「どうして、そう思うのです?」

「何だか、そんな気がするんだよな。不安になるんだ」

「よくわからない仮説ですが。仮に、紗希ねえに近づいたら、
女の子に戻つてしまつてしまふ」

「うん」

「それでも、あなたが男の子であつたときに積み重ねたものは、あ
なたの中に残ります。女の子に戻つたときには、昔に積み上げてき
たものが、あなたの内で輝きますよ」

きらりと輝く笑みを浮かべしおりんの顔は、苦しむ者を諭す神
の光の「」とく、燐然とあたしを照らしていた。のだが。

「うー？」

難しい。

何となく、意味はわかるのだけれど。

ああ、しおりん、ため息をつかないで。悲しいから。

「はあ。どちらにしろ、いい経験だつたじゃないか。ヒーリングですわ」

「そうなのかなあ」

「戻つたら戻つたときに、考えればよいのですわ。今は、田先のこ
とだけを考え、集中して生きてゆけばよいのです」

そして、しおりんは笑つた。

そうだなあ。その通りだ。今のはたしは、今だけを考えて生きれ
ばいい。

「そうだね、わかつた」

「わかれよろしい」

前を向いて進む。

それだけでいい。

と、そんなことを考えていると。

「う……ん？」

通学路の先、大きなビルのふもと。小さくにしか見えないのだけ
れども。

数人の男子に、一人の女子が囲まれ、路地に入つてこうとして
いた。

「どうしましたの？」

あたしは田がいい。視力検査は万年最高の結果に終わる。

最近は男の子とも連れ合つて悪いことをする子も多いし、平和そ
うであれば、干渉するつもりはなかつた。そんなの、知つたこつち
やない。勝手にやればいい。

「……！」

でも。

目をこじらして、その姿を見つけた瞬間。

あたしの足は、まるで爆発するかのように加速を始めよつとじていた。

「あっ、朱音くん！」

「しおりん、離して」

制服の襟を、しおりんはぎゅっと掴む。

どうして止めるのか。どうして行かせてくれないのか。しおりんの力は弱いながらも、強い意志で握られていた。絶対に行かせない。絶対に干渉させない。そんな思いが伝わってきた。

「ダメです、手を出しちゃ」

「理由は、後で聞くから」

でも、そんなことは知るか。

あたしは、あたしのやりたいようにやる。

しおりんにだって、干渉させはしない。絶対に。

「あっ……」

だから、彼女の制止を軽く振り切り。そして、駆け出してゆく。

紗希センパイの元へと。

人もおらず、薄暗い路地。

必死に走り、追い付いた先には、あからさまなチンピラたちと、薄暗い中でも、微かな光を受けて透き通る、可憐な少女の後ろ姿。『外で会っても、出来る限り話しかけるな』。

そんなルールが、あたしと紗希センパイの間にはあった。でも、このときだけは別だ。誰が何と言おつと、救い続けてきた。

「……っ！」

このクソ野郎ども、紗希センパイを連れて何をするつもりだ。

あたしの頭は、血が沸騰して崩壊してしまいそうなほど、怒りに燃えていた。

「おい」

だから、あたしは彼らに怒りを投げつける。

すると、不機嫌そうに眼を細めて、彼らはこじりひりに振り返る。紗希センパイも同じで、諦めきった瞳を潤ませて、それでも、どうして、と疑問の色を漂わせていた。

「その人連れて、何をしようってんだよ」

「あ？ 関係ねえだろ、てめえには」

団太い声で、チンピラの一人が語る。

ああ、見覚えがある。以前も、ボコボコにしてやった奴だ。あたしが転校していつたからって、自由にのびのびと暴力活動に勤しんでるのか。

「早く答えろよ。俺は、そんなに気が長くねえんだよ

「知らねえよ。俺らは、頼まれてやってるだけだ」

「誰にだよ」

「誰だ。

こいつらを操り、紗希センパイを虜めようとするのは誰だ。

「んなもん、関係ねえだろ」

「後で、ゆっくり聞いてやるよ」

北学の人間か。

それはわからない。

でも、わかつたら、ぶっ殺してやる。

それくらい、あたしの頭の中は煮えたぐり、溢れ続ける怒りは、全く留まる事を知らなかつた。

「へつ、聞けるもんならな」

「……紗希センパイ、こっちに

とりあえず、早く紗希センパイを回収しないと。

敵側にいられちゃ、こっちの攻撃も自由にできない。

「朱音くん……どうして……」

「何だよ、この白いやつの友達か何かかよ」

白いやつ。

くそ、何かすげえムカついた。

好きな人のことをバカにされるのって、やっぱり本当に腹が立つ。

「名乗る価値もねえよ。……センパイ、早く」

「……」

「おー、ここいつ北学に転校してきたってこいつ……」

「あ？」

「ヤベエ奴らしいぞ。すげえヤベエって話を聞いた」

「そんな噂が流れてるのかあ。

と思いきや。

「関係ないだろ。女みてーな顔してるじゃねえか」

「だな。まあ、一本くら~折つてやりや、自分の立場わかんだろ」「そうだな」

まあ、弱く見られているのならいい。

その分だけ、相手を圧倒しやすくなる。

それくらいに考えていて、全くデメリットに思わなかつたのだけれども。

「……前、女の子に負けてたじやないですか」

紗希センパイが、何を思ったのか。

小声で、チンピラたちに対して本当に弱い抵抗を試みていた。

「てめえっ！」

「……事実です」

どうして、そんなことを今言つのか。

どうして、紗希センパイは今、チンピラに狙われるようなことを言つのか。

「お前、黙つてりや調子乗りやがつて」

案の定、チンピラの一人は怒り。

腕を振り上げ。

攻撃を、紗希センパイへ降ろそうとしていた。

「紗希センパイ、何でそんな余計なことをつ……！」

大変だ。

彼女の身体にキズをつけるなんて、そんなこと誰であつても許さ

れない。

とりあえず、ミッションスタートだ。紗希センパイを守りながら、チンピラ全員をぶっ殺す。簡単なことだ。紗希センパイが、余計なことわえしなければ。

「仕方ねえつ……！」

そして、あたしは走り出す。

そして、敵を殲滅しようとする。

紗希センパイの、赤い瞳に怯えの色が滲む。

ああ、暴力的なところなんて、出来れば見せたくないなかつたのだけれども。

そんなことは、今は関係ない。そんなこと、気にしていられない。ただ、田の前の敵を倒し、情報を聞きだし、少しでも紗希センパイを取り巻く状況を改善させられたら。

頭に浮かんでいたのは、単純な思考だけだった。

ミッション、コンプリート。

あたしの足元には、チンピラたちの肢体。もとい、死体。半死体。いとも容易く、彼らを制圧することができた。

多分、山岡よりも弱かつたんじゃないだろうか。余裕すぎたし。

「おい」

しゃがみこんで、地面上に転がるチンピラの一人の顎を持ち上げ、尋ねる。

多分、こいつが一番強かったし、ボス格だ。完全に気絶はせずに、意識はあるし。ぼんやりとしてるけど。

「誰に、何をやれって言われた」

「……北学の、女子だよ」

「何をやれって言われたのか、早く言えよ」

「ホテルに連れ込んで、ヤツて写メ撮つて送れって言われたんだよ」

理解できない。

意味がわからない。

ただのこじめにしては、あまりにも過酷じゃないか。

「……」

「えげつねえわ、マジ女つてこやーよな」

「お前ら、前からやつてたのか」

「ちげえよ。今回だけだ」

「今回だけ。

本当かどうかはわからないが、目が真実味を帯びてこる。信じてやろう。

さて、本題だ。

「その女子つつーのは、誰なんだよ」

「高一の連中だよ」

「だから、誰なんだよ」

「さあ？ オレはボス猿に頼まれただけだ。まあ、女子全員じゃねえの。そいつ、嫌われるみたいだしな」
紗希センパイが嫌われている。

そんなことは、知っていた事実だ。

でも、嫌われるからといって、何をしてもいいわけじゃない。
人の大切な身体をもてあそぶような、そんな悪質で陰湿なイタズラを許していいわけじゃない。

「……朱音くん、もういいですか？」
でも、紗希センパイは制止する。
どうしてなんだ。

「よくねえですよ！」

「もういいって、言つてるのです。わたしが言つてるのですから、もういいでしょう」

「……紗希センパイ」、

「行きましょう。先に行つてますね」

でも、何も言えない。

ゆづくと、背中を向けて歩き始める彼女を見つめ。

「……っ！」

あたしは、追いかけることができなかつた。
どうしてだらうか。足が動かなかつたのだ。

「おい」

「あ?」

「お前、名前は何て言つんだよ」
むぐりと身体を起こしたチンピラが、あたしを見つめながら尋ねる。

「青木朱音だ」

「……青木?」

「転校したやつとは、関係ない」

どうせ、そつちと一緒にになつてゐるのだらう。

まあ、実際はあたしなのだけれども。あたしなのだけれど、今のあたしはあたしじゃない。ややこしいな。

「ああ、そうか。おい、青木」

「何だ」

「オレたちはお前に負けた。オレはもう、そのセンパイさんには手を出さねえ」

「当然だろ」

もしも、また手を出したら。

次は、半殺じじやすまない。ぶつ殺す。

「だから、オレたちのボスになつてくれよ。お前、強いし」

「はあ?」

何を言うのだらうかと思っていたが、バカバカしい話だ。

オレたちのボス? それって、チンピラのボスになれつてことだよね。

「もしも、センパイさんがいじめられてゐるのを見たり、聞いたりしたら、オレたちが助ける。その代わり、お前もオレたちを助けてくれ

れ

「お前たちに、何のメリットがあるんだよ」
メリットがわからない。

実質的には、紗希センパイの用心棒じゃないか。

「強いやつと、一緒にいたいだけだ。あとは、他のチキンピラと戦う時に、助けてくれればそれだけでいい」

「……」

「お前は、北学の中でセンパイさんを助けりやいいだろ。オレたちは、北学の外でセンパイさんを助けてやるよ。オレたちの仲間は何百人といふ。悪い話じゃないだろ」

何百人？

何百人もいるチキンピラの、ボスになれって？

ちょっとそれは、リスクが大きすぎるんじゃないかな。躊躇するなあ。

「それは……」

「青木、もう一つ、教えてやる」

戸惑っていると、

「センパイさんは、北学女子のいいオモチャだ。このままだと、何されるかわかったもんじやねえぞ。今回のが成功したら、それ脅しのタネにして、もつとやらせるつもりだつたらしいからな」チキンピラが、再び言葉を紡ぎ始める。

「……どうじうことだよ」

「あいつら遊ぶのに飽きたから、やらせようとしてんだよ。オッサン相手にな、金取つて」

「んなもん、絶対に許さねえぞ」

「どうかして。頭がおかしい。

どじからどうすれば、そんな発想が出てくるのか。恐ろしそう。

「オレらだつて、ドン引きだよ。さすがにねえだろ。それにな、青

木

「何だよ」

「あの女子連中、相当地頭おかしいわ。オレらが言つのもなんだけどな。容赦しねえよ、特にセンパイさん相手には、相当地ひでえことをやつてる」

「そんなこと、一度も

一度も、紗希センパイの口から語られたことはない。

いじめ現場を、救済したことは何度もある。それでも、いじめの内容を知ることはなかった。一度も、何をされて、何があったのかを知ることはなかった。

「そりや そりだろ。後輩に迷惑かけたくねえんだろ?」

「……紗希センパイ」

「青木。男と男の約束だ。絶対に破りはしねえ。どうだ」「わかった。これから、よろしく頼むよ」

そこまで言われたら、あたしも信じざるをえない。

男と男の間の約束は、鉄のように固いと聞いている。

握り拳を、がちっと合わせ。

そうする」とで、契約が成立した。

「任せろよ。もう、指一本触れさせやしねえ。メルアド交換しようぜ」

「ああ」

「そうだ、もう一つここ」と教えてやるよ、青木

「んあ?」

「センパイさんはまだ、誰ともやつてねーし、やらされてねーよ。安心しろ。まあ、自分から男作つてやつてるなら、まあ別だけどな」何を言われるのか。

ぼうつとしていたが、一気に頭がしゃきつとした。

そして同時に、何だか安心してしまつ自分がそこにいて、何だか恥ずかしい気分になつてしまつた。まさか下ネタを、こんな所で使つてくるとは。

でも、有用な情報……なのかな? わかんないけど。

「ば、知るかよ、んなこと!」

「好きなんだろ、お前。すぐこでもわかる。任せろよ、みひみひやるから」「くそが……」

「ハハツ！」

男の笑いが、路地裏を支配した。これで、紗希センパイの外の安全は確保されたも当然だろう。これで、北学の人間は、いじめの手先としてこいつらを使えなくなつたのだし。

じゃあ、後は。

あたしが、北学の中で彼女を守るだけだ。

その様子を、しおりんは黙つて遠くから見つめていた。

何かを言いたそうにしているが、何も言うことはなく。

あたしは、紗希センパイがどこかへと去つたのち、しおりんと一緒に学校に向かい、無言の時間を過ごして、無言の昼食を終えた。時間はいつもより遅く流れながら、過ぎていつた。

そして、放課後。

夕陽が差し込む英語研究会の部室で、あたしは紗希センパイと二人。

何も話すことなく、何もすることなく、ただただじいっと、テーブル越しに向かい合つていた。

何を話していいのかわからない。

何をすればいいのかわからない。

ただ、意思だけは伝えておこうと思つた。

「紗希センパイ」

「はい」

「俺、紗希センパイを守ります」

だから、意思表明をする。

「朱音くん」

のだが。

「……はい」

「本当に、ありがと」

「じゃあ……」

「でも、結構です」

弱々しい笑みを浮かべた紗希センパイは、あたしの申し出をきつぱりと拒絶した。

「朱音くん。見られてしまったから、お話、しておいたりと思います」

「……」

今から話されることは、きっとあたしがもう知っていることだ。もう数年前から知っていて、何とかしようと動き続けたことに関係することだ。

「皆さんは、わたしが嫌いみたいです。ですから、この学校じゃわたしは限りなく浮いた存在なんです」

「そんなこと……」

至高の容姿を持ち、決して抵抗しない弱さを持つ紗希センパイ。いじめのターゲットとしては、最適だ。

何をされても誰にも言わない。誰にも助けを求めず、ただじいと耐え続ける。

そんな彼女は、不満のはけ口になっていた。

「いいんですよ、朱音くん。本当のことを、助けてくれたあなたには知つて欲しいんです」

「……」

でも、このままでいいのか。

よくないだろ？

「わたしは昔、わたしを助けてくれた人が、追い込まれていくのを見ました」

「え？」

紗希センパイに、手を差し伸べた人が、あたし以外にもいた。誰なんだろう。孤立していた彼女を救ったのは、あたしだと自認していたのに。

「その人は、わたしのせいで、ここにはいられなくなってしましました」

「いつ、いらなくなつたんですか」

「昔の話ですよ。ちょっと、昔の話です。……最後には、怒つた

のでしようか。何も言わずに、田の前から去つて行きました

薄情な人間だなあ。

去つて行く前には、何があつても別れは告げるべきだ。

そうしなかつたから、紗希センパイはこんなに傷ついてるのに。

「事情があつたんだと思います。俺にはわかりませんけど」

まあ、助けていたのなら一応擁護してやるが。

「それでも、それなら一言くらいは残してくれるでしょう。よっぽど、シヨックだつたんだと思います」

悲しい色を帯びた瞳に、僅かな水分を満たして、紗希センパイは語る。

「ああ、よっぽどシヨックだつたんだろうなあ、紗希センパイ。
「わかつてくれましたか。わたしはもつ、あんな辛い思いはしたくないんです」

「でも、辛い思いをしてるのは、紗希センパイじゃないですか」「自分のことなら、耐えられます。大切な人が辛い思いをするのは、耐えられないんです。それに、朱音くんは汐里の彼氏さんでしょう？」

？」

突然の言葉に、思わず吹き出してしまった。

あたしがしおりんの彼氏？ そんなこと。

「ち、違いますって！ 友達です、ともだち…」

「ふふ。隠さなくてもいいんですよ。汐里から、最近よく話を聞くようになりました」

「違いますってば！」

「だめだ。これは紗希センパイの論点すり替えテクニックだ。まさか、出会つたばかりのあたしに使うとは思わなかつたが。都合が悪くなると、黒崎姉妹はこうやってあたしを動搖させて、話題をすり替える。

「……じゃあ、紗希センパイにも好きな人つているんですか」

「じゃあ、こっちもすり替えてやる。

どうせ、元の話題には戻れないのだ。

それなら、聞きたいことを聞いてやる。

いじめから助けるのと、紗希センパイの許可なんて不要だし。勝手に助ければいいし。

「はい、いました」

はぐらかされるかなあ、と思つたら。

「えつ、誰ですか？」

まわかの返答に、あたしは思わず身を乗り出して尋ねる。
紗希センパイの好きな人。誰なんだろう。どうか誰だ。探し出してやる。

「ひみつ、です」

「もしかして、俺ですか？」

どきどきする胸の鼓動を無視しながら、あたしは尋ねてみる。

「後輩としては、好きですよ」

「ですよね……」

あまりにも早い、瞬間の即答。

「？ どうして、そんなに落ち込むのですか？」

「いえいえ、何でもないです」

まあ、出合つたばつかだし。

好きになつてくれるとは思つてなかつたけど、やつぱりなんだかショック。

「そういえば、何となくなんですか？」

「はー」

「汐里も、朱音くんも。何か、わたしに隠していませんか？」

「え？」

鋭い、紗希センパイの指摘。

隠し事ならある。

あたしは、女の子の青木朱音だ。

言つことで、精神的なショックを『えるかもしけなべて言えず、ここまで来ているが。

「付き合つてるのかなあ、とぴんときたのはそこなんです」

「どうしたことですか？」

「何だか、秘密を共有する一人、うまんぢっくじゃないですか？」

その通りだ。

一人だけの秘密。あたしとしおりんはそれを共有している。

正確には、父さんと母さんも知っているけれど、その他の人は何も知らない。あたしたちだけの秘密だ。ロマンチックかどうかは別として。

「えーあーえー……」

「どうです？ なかなか、カンが鋭いつて言われるんですよ」

「確かに、凄く鋭いです」

「でしょう」

自信満々の、紗希センパイの笑み。

太陽のように明るく、柔らかく、温かかった。

あたしはこの笑みに惹かれたのだ。連日のケンカ、戦いの中で荒んでいた心を癒してくれた、この笑みに。

「でも、ハズレですよ。あたしとしおりんは、付き合つてません」

カンは鋭いが。

さすがに、あたしが元女の子という発想は、浮かばなかつたようだ。

「なんだ。そうなんですか」

「はい。残念でしたね」

話すことで、嫌われてしまうかもしれない。

話すことで、騙していたのかと怒られるかもしれない。

そんな恐怖が、あたしの頭の中を支配していた。ややこしい思いだ。本当に。

そして、紗希センパイといつも通りに部室で別れ、帰宅後。

「ただいま。あれ？」

ドアノブを回して、リビングに至るドアを開いた瞬間。見慣れない人間が、テーブルに座っているのが見えた。

しおりんだ。

「どうしたんだよ、しおりん」

「少し、お話があります」

「あれ、母さんは?」

辺りを見渡すが、いるはずの母さんはいない。

不用心だなあ。

「少し、席を外してもいいですか」

「ああ、そつなんだ」

「朱音くん。今日のことは、少し問題ですか」

「何が?」

何が、と黙りものの心当たつはあった。

どうせ、紗希センパイとか、そいらくんの話だ。

「あのチンピラ、こじらを仕切ってるヤンキーのボスです」
心配そうに、あたしを見つけるしおりん。

そこまで心配することはない。何といつことはないし。
くすりと笑って、あたしはしおりんの向かい側に座る。

「へえ、そつなんだ。じゃあ、俺が今度からボスだな」

「そんな気楽な話じやありませんわ。朱音くん、悪い事は言いませ

ん。もう、あの連中に関わるのは、どうかやめてください」
あたしは軽い気持ちだったのだけれど。

しおりんの顔は、笑っていない。本気で黙っている田代だ。

「危ないから、とか言つんだろ」

「そうです。危ないです」

「大丈夫だつて。何とかなるから」

今まで、危ない橋なんていいくらでも渡つた。

今更、チンピラのボスになるくらい、何てことはない。

それに、ボスになれば、学外での紗希センパイの安全が確保できるし。

「ならなかつたときは、どうするんですの」

「その時はその時だる」

「そんな話じゃありません」

「どうして、しおりんがそんなに心配するんだよ」

「や、それは……」

明らかに狼狽するしおりん。

どうしてそこまで狼狽えるのか、わからなかつたけれども、きつとあたしに反論されてしまつて、必死に言い返す理由でも考へているんだろう。

「俺は男の子になつたんだから。そんなに心配してもらわなくていいって」

さすがに過保護だ。

「でも……」

「心配してくれるのはありがたいけど、俺は大丈夫だから」「でも、もしも、危ないことに巻き込まれたら……」

「その時は、しおりんが助けてくれるんだろう」とすると。

「え？」

しおりんは、田を丸くして、こひらを見つめる。

「言つてただる、男の子になつた日」。面倒なことは処理してやるつて

「……そう、でしたわね。それでも、助けるとは言つてませんわ」「しおりんなら助けてくれるつて、信じてる」

助けるとは、確かに一言も言つていない。

でも、しおりんなら、そうしてくれると想つた。

根拠は全くないけれど、助けてくれると思った。だから、男の子になつたあのとき、電話したんだし。

「どうして、そう言い切れるんですの」

「しおりんは、ずっと助けてくれたし」「たつた、それだけですの？」

「それだけで、十分だろ」

「……本当に、あなたつて残酷です」

「へ？」

「残酷な人ですわ、あなたは」「どういう意味？」

わけがわからない。

あたしのどこが残酷なのだろう。

助けを求めるすぎるから、残酷なんだろうか？

わからないなあ。

「それがわからないから、残酷なんですよ。……そうですわね、面倒なことは処理してや

るって、言つてしまつたのですわね」

「うん。優しいもん、しおりん」

厳しいところもあるけれど、本当は優しい女の子。

それが、しおりんだ。それがしおりんの、本当の姿だ。

「でも、一つだけ約束してください」

そんな彼女が、あたしを見つめて、真剣な表情を浮かべて。
何か、言おうとしている。

「うん？」

「絶対に、危ないことばしないよ。どうせ、危ないことを
するときは、少しでもわたくしに相談してください。それだけ、守
つてくださいまし」

本気で心配してくれている。

そんな目だ。

「わかった。出来る限り、そうする」

「出来る限りじゃなくて、絶対ですわ」

「絶対、そうする」

何度も確認をされ、思わず苦笑してしまった。

でも、これがあたしを大切に思つてくれている証だ。

「はい。お願ひします」

「それで、話つてそれだけ？」

しかし、何だか拍子抜けだ。

「そうですねけれども」

「紗希センパイの話をじにきたんじゃないの？」

何だか深刻な雰囲気を漂わせていたから、きっと紗希センパイに
関係することだと思ったのに、

「違いますわ」

「へえ……」

即答されてしまった。

うーん。

「どうして、わたくしがじにで紗希ねえの話をするって。」「自分の姉が、いじめられてる現場、初めて見ただろ」「説明しづらいけれども、率直に話す。すると

「いいえ」

彼女は、真顔のまま、首を横に振った。
あたしは、首を縦に振ると思っていた。
でも、彼女はそうしなかった。

「へ？」

「どうしてなんだ。どうしたことなんだ。」

「初めてじゃありませんわ」

「どうこうことじだよ」

問い合わせ返すと。

「見過ごしたのも、放置したのも、初めてじゃありませんわ」
されつと、しおりんは言い放った。
いじめを、見過ごしたのも。
いじめを、放置したのも。

初めてじゃない。

「自分のお姉さんだろ、なんで放置するんだよ

いじめがあるといふことは、知つてゐる。

それでも、実際に現場に遭遇すれば、何かアクションを起こすは
ずだらう。それでも、彼女は今まで、何も起こさなかつたのだ。今
まで、現場に遭遇しても、スルーし続けてきたのか。

「それを、紗希ねえ自身が望むからです」

「意味がわからんねえ。んなもん、本当かどうかわからんねえだら」
残酷すぎる。

あまりにも、悲しそぎる。

しかし、しおりんは。

「わかります。わたくしは、システムですから」

ただ、その一言で話を完結させてしまつた。

何だらう。

「それでも助けるだろ、普通は」

割り切れない。

あたしは、そんな現実は認めたくない。
しかし。

「朱音くん」

「何だよ」

しおりんの諭すような声に、いらいらしながら返事を返すと。

「紗希ねえは、手を差し伸べられることを望んでいませんわ」

「そんなこと、しおりんが決める」とじやない

「黒崎家の内情に一番詳しいのは、わたくしですわ。あなたじやない。あなたは、黒崎の人間ではない」

心にすしりと、重くのしかかる言葉が投げつけられた。

そうだ。あたしは、黒崎家の内部なんて、何も知らない。

あたしはただの女の子だった男の子で、紗希センパイの家族でも
ない。

「……」

「紗希ねえは、副生徒総長になれる器でした。わたくしなんかよりも、優秀で知的で、頭の回転も速い。氷のように冷徹な判断を下す

かと思えば、温かみのある施しもできる。そんな方です。でも」「でも？」

「お爺様たち。黒崎家の偉い人々は、紗希ねえを拒絶したんですね」
しおりんは悔しそうに、それでも懸命に感情を堪えてい
るよう見えた。

以前、紗希センパイから聞いたことはある。聞いたことはあるが、
何度も聞いても胸糞が悪いものがある。

「……アルビノ、だから？」

「そうですね。その瞬間、わたくしが副生徒総長になり、黒崎家当
主の座を分家と争うことが決定したのです」

「何が悪いのか。

見かけが、ちょっと人と違うだけだ。

それなのに、どうして黒崎家は紗希センパイを認めないのか。

「紗希ねえは、わたくしを応援してくれています。運営だって、本
当のところは手伝ってくれてもいます。でも、絶対にそのことを表
には出さな。絶対に、自分には関わるなど言つて聞かないのです」

「紗希センパイは、どうしてそんなことを

「優しい方、ですから。自分のことで、誰かに迷惑をかけたくない
のでしよう」

「そんなおかしいだろ」

「だから、あたしは想いをぶつけ
する」と。

「ええ、おかしいです。おかしいですわよ。その通りですわ」

堰を切つたかのように、しおりんの口から呪いの言葉が紡がれる。
「でも、どうしようもないんです。紗希ねえは、他の人と何も変わ
りません。施術を受けて、身体の弱さは克服します。でも、黒崎
家では化け物扱いですわ」

悲痛な思いを、言葉に乗せて。

しおりんは、姉に対する思いを吐露し続ける。

「自分が慕う姉が、泣きながら懇願する姿を、あなたは想像できま

すか

涙は流していない。それは、副生徒総長、次の当主としての意地か。

それでも、必死に放たれた言葉には、涙の色が滲み出していた。
「出来ないでしょ。わたくしは副生徒総長です。いじめた生徒を、処分に付することだってできる。いじめた人間を、退学に追い込むことだってできる。でも、紗希ねえはそれを望まなかつたんです」

変えられない現実を、しおりんは呪い続ける。

副生徒総長であるのに、権限行使したいのに。

それでも、姉がそれを望まない。だから、どうする?ともできな

い。

「夕暮れの教室で、『わたしのことで、汐里に迷惑はかけられない』って、いじめっ子に服をはぎ取られて下着姿のまま、泣きながらわたくしの足に縋り付いた大好きな姉の姿を、わたくしは一生忘れません。いえ、忘れられませんわ」

情景が、あたしの頭の中に即座に描写される。

そんな場面に遭遇してしまったら、もし、あたしがしおりんだつたら。

あまりの悔しさに、怒り狂っていたに違いない。でも、怒り狂つても、肝心の姉は助けを求めない。

それどころか、逆に気を遣われる。それは、どれだけ悲しいことなんだろう。

「その時わたくしは、心から泣きました。自分の姉は何も悪いことはしていないのに、どうしてここまでされないといけないのか、ど。でも、これは決ましたことなんです。どうしようもなくて、何も変わらない闇なんです」

変わらない闇。

変えられない闇。

姉が好きなのに、好きな姉は救済を求める。

葛藤の中で生きる、しおりんの辛さが言葉の一つ一つから伝わる

てくる。

「しおりん……」

「だから、朱音くんが紗希ねえを助けようとするなら。紗希ねえの意思を無視して、何かコトを起しそうとしてこるのなり、わたくしは反発しますわ」

小さく、しかし重く紡がれる言葉には、しおりんの覚悟が滲んでいた。

彼女たちの背負った苦しみは、あたしの想像をはるかに超えていく。

想像もできないところに、彼女たちの苦しみがある。

「彼女の苦しみは、彼女にだけわかること。あなたが干渉するべき領域はないのです」

何も言えず、あたしは俯く」としか出来なかつた。

どうしようもない。

何も言い返せない。

だつて、あたしはただの人間で、紗希センパイの後輩で。

そこまで、踏み込めていたわけでもない。何も出来てないんだ。

「今、これを言おうとは思つていませんでした。……でも、良い機会ですので、言つておきます」

心を黒く染めるあたしなんて、全く知らない、とこつたよひ。「しおりんは、処刑の言葉を次々と披露してゆく。

「あなたと付き合つても、紗希ねえは幸せになれない」

心に響く、しおりんの声。

「…………」

どうして、そんなことを言つのか。

顔を上げて、しおりんの表情を見つめると。

副生徒総長として、責務を全うしているときの顔。

まさしく、黒崎家次期当主としての決意を浮かべていた。

「紗希ねえには、朱音くんは脳しか無い。あなたは、紗希ねえに夢を叶えてしまひ」

「夢を叶えぢや、ダメなのかよ」

「ええ、ダメです」

「……」

断固として言い切る、しおりん。

夢も叶えられず、夢を求めず。

そんな生活を、紗希センパイは叶いつて、強にられなければよい不可以ののか。

「絶望の淵に生きてゐるのです。紗希ねえは、朱音くんが希望を叶へれば、紗希ねえは闇に戻れなくなる。光の世界を望んでしまひ。そうなれば、傷つくのは紗希ねえなんです」

「あんまりだら、そんな言じ方。なんで、そんなことを叶ひんだよ。昔は応援してくれたのに」

「女の子相手の恋愛なら、絶対に成就する」とはないだらうと、思つていてからですわ」

「……本当かよ」

最悪だ。

そんなことを思つていたなんて。

もし本当なら、あたしを支えてくれていたあのしおりんは、こいつたい何だつたんだ。

「本当ですね。……でも、今の朱音くんは男の子。もしかすると、成就してしまつかもしない。そうなつてしまえば、傷つくのは紗希ねえです」

ショックを受け、失意の底に沈むあたしに。

「はつきり言つておきます」

しおりんは、一言一言、ゆっくりと。

「あなたと付き合えば、紗希ねえは不幸になる」
あたしに理解させるよつて。

「わかりましたか?」

言葉を紡いでゆく。

「干渉するなど、言つてはいるのだから、干渉しないのが一番なんですよ」

「諭すよ！」に、諦めさせられるよ！」。

「朱音くん、わかってくれましたか」

酷く残酷で、優しく、あたしの心を絞め殺す感覚を感じえる。

応援してくれるとか、支えてくれるとか。

あたしの考えが、甘つちよらかつたのだろ？

そんなことはない。

あたしは、紗希センパイが好きなんだ。

「わからんねえよ、意味がわからんねえよ……」

「紗希ねえのためなんです」

「……」

だから、何を言われても。

あたしは、決して思いを捨てない。

そう、決意をしたのだけれども。

「もしも、それでも、朱音くんが紗希ねえを幸せに出来ると言つうの

なら」

「……？」

その空氣を察したのか、しおりんが厳しい視線を浴びせながら語る。

「誓いを立ててください」

「何をすりやいいんだよ」

「何もしなくていいですわ」

きつぱりと、言い切るしおりん。

意味がわからない。どうこうことなのか。

「？」

「わたくしは、姉が大切です。とても大切に思っています」

「ああ、わかつてゐる」

システムだ、と繰り返して述べている。

その言葉が本当なら、しおりんは姉が大好きだ。

姉が大切だからこそ、姉の望みを聞き入れてきた。

それがどんな望みであっても、聞き入れてきたのだ。

彼女が背負つた覚悟は、あたしが想像するよりも重く、深いだろう。

「もしも、理不尽な幸せを与えて、その後にそれを奪つて、絶望の淵に叩き落としたとしたら、紗希ねえは悲しみ、自分を責め、やがて自決に至るでしょう」「う

「どうしてわかるんだよ」

「妹、ですか。姉の苦しみは、手に取るようにわかります」

根拠は薄い。

薄いが、そうなるのだろう。

「そうかい」

しおりんがそう語るなら、そつなつてしまつたのだろう。

紗希センパイの心は、纖細で脆い。

ぱっとある口消えてしまつても、全く違和感はない。絶対にそんなこと、ありえないと信じたいが、違和感 자체はない。

「はい。それで、もしも、紗希ねえが死んでしまつたら

「たら?」

「わたくしは、朱音くんを一生許しません」

今まで見たことのないような、殺意に満ちた瞳。

かつてあたしの前では露見させたことのないような、決意に満ちた瞳。

「逆に、あなたに殺されてしまつかもしれない。それでも、わたくしは絶対に許さない」

本気だ。

しおりんは、本氣で言つている。

嘘でも偽りでもなく、心からそつ言葉を紡いでいる。

「あなたを殺して、それから死ぬ。それくらいの覚悟は、出来ています。朱音くんはどうですか。生半可な気持ちで、紗希ねえに手を

「おまえがうるさいんだから、あいつをやんか！」

生半可な気持ちで、紗希センパイと付き合おうとしているわけじ

や
な
い。

好きになつたのは、そりや些細なことだつたかもしれない。でも、それだけじゃないし。そんなことを言われる筋合いなんて

ない。

言いたいけれど、
させてくれない！

「女の子が好きだから、紗希ねえが好きになつた。可愛くて綺麗で幻想的な紗希ねえを好きになつた。それだけじゃないのですか。見かけだけで、好きになつたのではありませんか」

絶対に、そうじゃない。

あたしは、あたしを認めてくれる、紗希センパイが好きになつた
う。」

本当に、紗希センパイが好きなんだろうか。心は、自分ですらもはつきりしていな。わからぬ。本当の

- 1 -

「ほら、言ひ返せないでしょ。きっと、その通りですわ。わたくしを嫌つてくださるなら結構。ぜひ、嫌いになつてくださいませ」返答に詰まるあたしを尻目に。

しおりんは、帰り支度を始める。
勝利宣言か、敗者であるあたしを笑うつもりか。
いずれかはわからない。

でも、あたしは言い返せなかつた。あたしの負けだ。

……もう一度、頭を冷やして、自分でやぐらと考えてくださいませ。わたくしの大切な、大事な方として」

でも、あまつこも言葉が過ぎる。

少し、さすがにあたしもカチン、と来た
絶交だと、言い切つてやるのは簡単だ。

しかし。

しおりんが去つてゆく瞬間、ぱほりと瞳から一粒の涙がこぼれ出るのを見た瞬間、何も言えなくなってしまった。

そして、しおりんが去つていった後。

「はあー……」

自問自答する。

あたしが好きだったのは、紗希センパイなのか。
あたしが好きだったのは、女の子で、可愛い女の子、だったんじゃないのか。

しおりんに言われた言葉が、重くのしかかり続ける。

ため息しか出ないなあ。はあ。

「あら、汐里ちゃん帰ったの？」

「うん……」

「どうしたの、酷い顔よ？」

様子を見てリビングにやつてきた母さんが、先ほどまではしおりんが座っていた椅子に座り、あたしに優しく語りかけてくる。

「酷い表情つて言つてほしいなあ」

「酷い表情の顔ね」

「何も変わつてないよー。はあ……」

こんな冗談にも、返す元気がない。

そんな冗談に、付き合っている余裕がない。

「どうしたの。お母さんに、言つてみなさい」

事の重大さを察知したのか、母さんが尋ねてくる。

「うー？」

「ほり、聞いてあげるわ」

「じゃあさ、お母さん」

聞いてくれるところのなら、聞いてもいぬ。

あたしだけじゃ、このまま詰まつてしまつやつだ。

「うん」

「こんなことがあつたんだけぞ」

だから、眞づべきではないことは隠し。

あたしが、紗希センパイのことが本当に好きなのか。

そのことについて、尋ねてみる。

数分後。

「 つてわけ。どうしたらこうんだろ?、あたし」

何度も頷き、母さんは話を聞いてくれた。

「あたしじゃなくて、俺。しつかりなさい、朱音」

「うん……」

「朱音は、女の子に戻りたいの?」

根本的な問題だ。

あたしは、どう思つてるんだろう。

最初は、男の子になれば、紗希センパイと付き合へると、簡単に

思つていた。

でも、今は違う。そんな単純な問題じやないと、氣づいてしまつ

た。

「うーん、わかんない。どうなんだろ?」

「先に言つておくわね」

「うん?」

先ほどまで、笑みを浮かべていた母さんの表情からは、笑いが消え。

しつかりと、あたしを見据えていた。

「朱音は、ずっと男の子のままよ。もう戻れないわ
ずつと、男の子のまま。
もう戻れない。」

なんで、母さんがそんなことを言つのか。

「え? どうして、言い切れるの?」

「そりや、言い切れるわよ」

「なんで?」

純粹に意味がわからなかつた。

だから、尋ね返した、それだけのことだ。

「だつて、お父さんも女の子だつたんだから」

だから、その言葉には頭をハンマーで殴られたかのよひな、衝撃

を『えられた。

「え？」

父さんが、女の子だつた？

じつこいつことへ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8870y/>

おとこのおんなのこ

2011年11月27日12時50分発行